

岡本韋庵『大日本中興先覚志』訳註（その三）

有馬卓也

（本稿は徳島大学言語文化研究13の続きである）

「既出」としたが、加筆の要ありと判断した場合は改めて記した。

目次

先覚志序（林琴南）

大日本中興先覚志序（岡本韋庵）

凡例

上巻

徳川公斉昭・藤田東湖・梁川星巖・藤森天山・佐久間象山・堀

田正睦・島津公斉彬・西郷隆盛（以上その一）

僧月照・僧月性・梅田雲濱・頼三樹三郎・橋本左内・吉田松陰

・金子孫二郎・大橋訥菴・堀利熙（以上その二）

下巻

宮部鼎蔵・真木和泉・平野次郎・有馬新七・中山公子忠光・川

上弥一・清水精一郎・武田耕雲斎・久坂玄瑞（以上その三）

高杉晋作・月形洗蔵・野村望東・駒井躋庵・武市瑞山・坂本龍

馬・大村益次郎・岩倉公具視・三条公実美

跋（伊藤賢道）

*人名に関する註について、（その一・二）と重複するものは

宮部鼎蔵

自嘉永中外舶始至、開鎖之説、囂然鼎沸、徧乎天下。諸藩有志之士、奔走四方、以企義舉者、前後相望、不堪屈指。而其主攘夷者、不能無過激之弊。動便殺身不顧。然皆由至誠憂國致之、大適人心。以救開港之失。所以能奏維新之功、不受外客之侮。若宮部鼎蔵・真木和泉・平野次郎、亦為其出類拔萃者也。宮部鼎蔵、名増美、号田城子、鼎蔵其稱。肥後国益城郡田城村人也。家世業医。父曰素直。有子三人。鼎蔵其中子也。自幼敏銳好學、有大志。不屑為医。從伯父増美学山田氏兵法。増美愛其才、養為子。嘉永二年己酉。年三十。奉藩命襲義父職為師員。益尚氣節、慕高山仲繩為人。慨然以尊攘自任。遂告藩主、周遊天下、歴訪志士。數歲而歸。受業者日多。四方志士遊鎮西者、必叩其門。鼎蔵皆善遇之。嘉永六年癸丑。美艦入浦賀。頗驕傲。鼎蔵不勝憤慨。再告藩主赴江戸。同志永島・轟二氏尋至。乃与佐久

間象山・吉田松蔭等謀。將有所為。而幕府怯懦、遂講和。松蔭奮然、欲投美艦以窺海外形勢。鼎藏壯其志、脫佩刀以贖之。松蔭事敗見補。鼎藏嘆曰「大事去矣」。上船抵伊勢、拜太廟而歸。大開家塾、講明尊攘大義。弟子愈進。遂為有司所忌。安政三年丙辰冬。弟大輔以事被幽囚。鼎藏亦從坐。被褫職。而豪氣不屈。躬耕於郊。有詠懷作曰

壯士悲秋秋已闌 荏苒歲月曉星殘 一天慘澹忤氣暗 半生蹉跎豪骨寒

文久二年壬戌。出羽人清川八郎、來訪曰「幕吏跋扈、不奉勅旨。朝廷大憂之。四方豪傑、奔走王事。吾子何為安然送日也」。鼎藏聞之、遽拉門生走京師、謁中山中將、訪草莽志士而歸。遂之薩、見有馬新七・田中謙助等、聞其欲果義舉於伏見。歸與同志建白藩主、拳國殉大義。時藩士大夫皆主佐幕。謂勤王越俎也。為勤王公卿士庶擯斥。鼎藏憂之。朝謁公族、夕訪巨室、百方論弁。遂能一定藩論。十一月。藩主使其介弟護美帥兵守衛禁闕。鼎藏與住江・轟二氏先入京師。於是熊本藩正議之名、始顯于朝野。時有報外舶連合將寇浪華者。輦下人心洶洶。朝廷諮問在京諸侯。鼎藏巡視摂泉沿海、作地圖附防禦策獻之。三年二月。藩主將朝京師。護美歸國。鼎藏等奉藩命留京。四月。歸國。五月。朝廷復徵護衛之士。鼎藏與五十余人入京。時諸藩衛士在京者、三千余人。三条公実美、為之總督。推鼎藏為曹史。詔將詣伊勢太廟、幸大和、親征外夷。鼎藏實參其機密。八月。廷議遽變、勤王公

卿士庶、多奔長防。鼎藏乃去京抵阿波。轉向土佐。鎖境不得入。露宿山中者數夕。深秋落木、鹿鳴呦呦。賦和歌數十首。皆寓愛君憂世之意。使人感歎垂淚不已。困頓而還。從三条公于長門。侍其左右。公與長藩議、欲奉前勅。明年夏。又使鼎藏諜京師動靜。鼎藏變姓名入京。寓三条橋西客棧池田号。時守護職會津侯容保、搜索勤王諸士甚嚴。鼎藏與同志謀將乘夜襲之。一夕糾合義故、飲于樓上。義故未悉聚。反為會兵所襲。衆奔逃。鼎藏憤慨大呼曰「何遽受奴輩縛乎」。乃自刃。実元治紀元甲子六月五日也。時年四十有五。鼎藏容貌温和、接人不見圭角。然臨大節則敢言、剛直不可奪也。性至孝。雅言「人苟不孝、其才雖美、亦禽獸耳」。其教子弟、必自「孝經」始。幼喪父、事祖母與母。苦節力行、多人所不堪者。藩嘗旌賞之云。是時來會者松田重助範義。肥後人。從鼎藏學兵法、奔走東西、勤勞王事。是夜、為捕手困、闕至死。年三十五。範義嘗在長州、其弟信道、自京歸國。途次來見。因謂之曰「汝疾歸死國。我当死于輦下。身雖微賤、所任甚重。可不勉哉」。揮淚訣別云。吉田年麻呂秀実、毛利氏小臣。從吉田松蔭、刻苦學兵法。是夜、遇敵來困、脫走抵河原町藩邸、束裝提兵而出、為敵衆來蹙、遂殞命。年二十四。松蔭常愛秀実守教、與久坂通武・高杉春風并稱為己良藥云。望月龜弥太義澄、高知藩人。從勝安房修航海術。是夜、在樓上、見敵至、拔刀斬一人。飛下而戰、又斬二人。走至戶外、見敵來蹙。傷二人。敵無復來近者。謂「宿志難酬」、乃屠腹。年二十七。其余

奮闘不克而死者数人。有西川耕蔵直純。京都書商。講道学窮『易』理、不喜記誦詞章。自父時為北村某別戸、輔幼子再興其家。保庇志士。為梅田定明修故宅、行追悼儀。坐池田号之變下獄。明年二月。病死。年四十二。明治元年、官憐直純幽死、給其孤女二口糧終身。鼎蔵僕国友常吉、熊本人。嘗從鼎蔵上京。当七卿西奔、鼎蔵將抵長防講回復策。志在必死。授金常吉使帰報家人。常吉欲与死、不敢聽。鼎蔵感賞曰「吾過矣」。明年。上京、常吉留守。未幾、聞鼎蔵遇刺。大憤上京戰於輦下。殆死纔免、乃帰長防、欲再從君。及長人謝罪弭戰、不堪憤慨、自刃死。烏呼、鼎蔵与吉田松蔭為膠漆友。忠孝性成、服勤尽養。能得内外懽心、真廊廟之器也哉。今聞其墓、在西京三条畷三縁寺中。門人・故旧、纒樹石以表之。若与松蔭・和泉諸士絶席者、何其不偶之甚也。

嘉永中より外舶始めて至り、開鎖の説、轟然(一)として鼎沸し、天下に徧し。諸藩の有志の士、四方に奔走し、以て義挙を企つる者、前後相望み、屈指に堪へず。而して其の攘夷を主とする者、過激の弊なきあたはず。動もすれば便ち身を殺して顧みず。然れども皆至誠憂国に由りて之を致し、大いに人心に適ふ。開港の失を救うを以てなり。能く維新の功を奏する所以にして、外客の悔を受けず。官部鼎蔵・真木和泉・平野次郎のごときは、亦其の出類拔萃(二)たる者なり。官部鼎蔵、名は

増美、号は田城子、鼎蔵は其の称。肥後国益城郡田城村の人なり。家は世よ医を業とす。父は素直と曰ふ。子三人あり。鼎蔵は其の中子なり。幼きより敏鋭にして学を好み、大志あり。医と為るを屑とせず。伯父増美に従ひて山田氏の兵法を学ぶ。増美、其の才を愛し、養ひて子と為す。嘉永二年己酉。年三十。藩命を奉じて義父の職を襲ひ師員と為る。益ます気節を尚び、高山仲繩(三)の人と為りを慕ふ。慨然として尊攘を以て自任す。遂に藩主に告げて、天下を周遊し、志士を歴訪す。数歳にして帰る。業を受けんとする者日々多し。四方の志士の鎮西に遊ぶ者は、必ず其の門を叩く。鼎蔵、皆善く之を遇す。嘉永六年癸丑。美艦浦賀に入る。頗る驕傲なり。鼎蔵、憤慨に勝へず。再び藩主に告げて江戸に赴く。同志永島(四)・轟(五)の二氏、尋いで至る。乃ち佐久間象山・吉田松蔭等と謀る。將に為す所あらんとす。而れども幕府怯懦にして、遂に講和す。松蔭、奮然として、美艦に投じて以て海外の形勢を窺はんと欲す。鼎蔵、其の志を壯とし、佩刀を脱して以て之に贖す。松蔭、事敗れて補へらる。鼎蔵嘆じて曰く「大事去る」と。船上じて伊勢に抵り、太廟に拝して帰る。大いに家塾を開き、尊攘の大義を講明す。弟子、愈いよ進む。遂に有司の忌む所と為る。安政三年丙辰冬。弟大輔、事を以て幽囚せらる。鼎蔵も亦従ひて坐し、職を褫はる。而れども豪氣屈せず。躬ら郊に耕す。詠懐の作ありて曰く

壯士 秋を悲しむ 秋已に闌く

荏苒(一) 歲月 曉星残る

一天 慘澹(二) 妖氛(三) 暗し

半生 蹉跎(四) し 豪骨寒し

文久二年壬戌。出羽の人清川八郎(一〇)、来訪して曰く、「幕吏跋扈して、勅旨を奉ぜず。朝廷大いに之を憂ふ。四方の豪傑、王事に奔走す。吾子、何為れぞ安然として日を送るや」と。鼎蔵、之を聞きて、遽に門生を拉いて京師に走り、中山中將に謁し、草莽の志士を訪ねて帰る。遂に薩に之き、有馬新七・田中謙助(二)等に見え、其の義拳を伏見に果さんと欲するを聞く。帰りて同志と藩主に建白し、国を挙げて大義に殉ぜんとす。時に藩の士大夫は皆佐幕を主とす。謂らく、勤王は俎を越ゆる(三)なり、と。為に勤王の公卿・士庶に擯斥(四)せらる。鼎蔵、之を憂ふ。朝に公族に謁し、夕に巨室を訪ね、百方論弁す。遂に能く一に藩論を定む。十一月。藩主、其の介弟(五)護美をして兵を帥いて禁闕を守衛せしむ。鼎蔵、住江(六)・轟(七)の二氏と先に京師に入る。是に於て熊本藩の正議の名、始めて朝野に頭はる。時に外舶の連合して將に浪華に寇せんと報ずる者あり。輦(八)下(九)の人心洶洶(一〇)たり。朝廷、在京の諸侯に諮問す。鼎蔵、撰・泉浴海を巡視し、地図を作りて防禦策を附して之を獻

ず。三年二月。藩主、將に京師に朝せんとす。護美、国に帰る。鼎蔵等は藩命を奉じて京に留まる。四月。国に帰る。五月。朝廷、復た護衛の士を徴す。鼎蔵、五十余人と京に入る。時に諸藩の衛士の京に在る者、三千余人。三条公実美、之が総督と為る。鼎蔵を推して曹史と為す。詔して將に伊勢の太廟に詣り、大和に幸して、外夷を親征せんとす。鼎蔵、実に其の機密に参ず。八月。廷議遽に變じ、勤王の公卿・士庶、多く長・防に奔る。鼎蔵、乃ち京を去りて阿波に抵る。転じて土佐に向ふ。境を鎖して入るを得ず。山中に露宿すること数夕。深秋落木、鹿鳴呦呦(一)たり。和歌数十首を賦す。皆、君を愛し世を憂ふるの意を寓す。人をして感歎垂涙せしめて已まず。困頓して還る。三条公に長門に従ふ。其の左右に待す。公、長藩と議し、前勅を奉せんと欲す。明年夏。又、鼎蔵をして京師の動靜を諜せしむ。鼎蔵、姓名を變じて京に入る。三条橋の西の客棧(二)池田号に寓す。時に守護職会津侯容保(三)、勤王の諸士を搜索すること甚だ厳なり。鼎蔵、同志と將に夜に乗じて之を襲はんと謀る。一夕、義故(四)を糾合し、樓上に飲す。義故、未だ悉くは聚まらず。反つて会兵(五)の襲ふ所と為る。衆、奔り逃ぐ。鼎蔵、憤慨して大呼して曰く、「何ぞ遽に奴輩の縛を受けんや」と。乃ち自刃す。実に元治紀元甲子六月五日なり。時に年四十五。鼎蔵は容貌温和にして、人に接するに圭角(六)を見せず。然れども大節に臨めば則ち敢言(七)し、剛直にして奪ふべから

ず。性は至孝なり。雅つねに言ふ「人、苟いやしくも不孝なれば、其の才の美なりと雖も、亦禽獸なるのみ」と。其の子弟を教ふるに、必ず『孝経』より始む。幼きとき父を喪うしなひ、祖母と母とに事つかふ。苦節力行し、多く人の堪へざる所の者あり。藩、嘗て之を旌賞(25)すと云ふ。是の時、来り会する者に松田重助範義(26)あり。肥後の人。鼎蔵に従ひて兵法を学び、東西に奔走し、王事に勤勞す。是の夜、捕手の為に困まれ、闘ひて死に至る。年三十五。範義、嘗て長州に在りしとき、其の弟信道、京より国に帰る。途次来り見ゆ。因りて之に謂ひて曰く「汝は疾く帰りにて国に死せ。我は当に輦れん下に死すべし。身は微賤なりと雖も、任ずる所は甚だ重し。勉めざるべけんや」と。涙を揮ひて訣別すと云ふ。吉田年麻呂秀実(27)は、毛利氏の小臣なり。吉田松蔭に従ひて、刻苦して兵法を学ぶ。是の夜、敵の来りて困むに遇ひ、脱走して河原町の藩邸に抵り、束装して兵を提ひきげて出づるも、敵衆の来り蹙せまりて、遂つひに命を殞おとす。年二十四。松蔭、常に秀実の教を守るを愛し、久坂通武(28)・高杉春風と並び称して己の良薬と為すと云ふ。望月龜弥太義澄(29)は高知藩人。勝安房(30)に従ひて航海術を修む。是の夜、楼上に在りて、敵の至るを見、抜刀して一人を斬る。飛び下りて戦ひ、又二人を斬る。走りて戸外に至り、敵の来り蹙せまるを見る。二三人を傷つく。敵の復た来り近づく者なし。「宿志(31)、酬むくい難し」と謂ひて、乃ち腹を屠る。年二十七。其の余、奮闘するも克た

ずして死す者数人。西川耕蔵直純(32)あり。京都の書商なり。道学を講じ、『易』理を窮め、記誦詞章を喜ばず。父の時に北村某の別戸(33)と為りしより、幼子を輔けて再び其の家を興す。志士を保庇す。梅田定明(34)の為に故宅を修し、追悼の儀を行ふ。池田号の変に坐して獄に下る。明年二月。病死す。年四十二。明治元年。官、直純の幽死するを憐れみ、其の孤女二口に糧終身を給す。鼎蔵の僕国友常吉は、熊本人なり。嘗て鼎蔵に従ひて京に上る。七卿西奔に当り、鼎蔵、將に長・防に抵り回復の策を講ぜんとす。志は必死に在り。金を常吉に授けて帰り、家人に報せしめんとす。常吉、与に死せんと欲し、敢て聴かず。鼎蔵、感賞して曰く「吾過ぎたり」と。明年。京に上るに、常吉は留まり守る。未だ幾いくばくならずして、鼎蔵の刺に遇ふを聞く。大憤して京に上り輦下に戦ふ。殆ほとんど死するも、纒わすかに免れ、乃ち長・防に帰り、再び君に従はんと欲す。長人の罪を謝し戦を弭やむるに及び、憤慨に堪へずして、自刃して死す。烏呼、鼎蔵と吉田松蔭とは膠漆こうしつの友(35)なり。忠孝の性成り、勤に服し養を尽す。能く内外の懽心(36)を得ば、真に廊廟の器(37)なるかな。今、其の墓を聞くに、西京三三さんじやう条じやう 啜なの三縁寺(38)の中に在り。門人・故旧、纒わすかに樹石もて以て之を表す。松蔭・和泉諸士と席を絶つがときは、何ぞ其れ不偶の甚だしきや。

一註

(1) 衆人が口々に憂え嘆くさま。

- (2) 抜群であること。
- (3) 高山彦九郎。一七四七〜一七九三。江戸中期の尊王論者。上野国郷士。上洛して公卿と交わり勤王の気を高める一方で、北辺危急を憂えて蝦夷に渡航などした。幕吏に追われ、久留米にて自害。林子平・蒲生君平とともに寛政の三奇人と呼ばれる。
- (4) 永島三平。一八二四〜一八六五。熊本藩士。儒学を近藤淡泉に、国学を林桜園に学ぶ。梅田雲濱・鳥山三河介・佐久間象山・藤田東湖・安島帯刀らと交わる。肥後勤王党の成立に尽力した。病死。
- (5) 轟木武兵衛。一八一八〜一八七三。熊本藩士。林桜園・近藤淡泉の門に入り、国学・神道・儒学を修めた。特に林の塾では永島三平・宮部鼎藏らと共に三傑と称された。真木和泉・小河一敏・久坂玄瑞・寺島忠三郎らと親交があった。後、捕らえられ獄中で維新をむかえた。
- (6) 歳月が長引くさま、のびのびになるさま。
- (7) ひどく薄暗いさま。
- (8) 不吉な事がおこりそうな気配。
- (9) 時機を失うこと。
- (10) (その二) 梅田雲濱の註22に既出。
- (11) 一八二八〜一八六二。薩摩藩士。安政年間、江戸へ出て水戸藩士と交わり国事に奔走した。有馬新七らと九条閑白襲撃を謀る。寺田屋事変において斬られ、翌日切腹を命じられた。
- (12) 自分の職分を超えて他人の事に世話をやくこと。
- (13) 排斥に同じ。
- (14) 他人の弟に対する敬称。
- (15) 住江甚兵衛。一八二五〜一八七六。熊本藩士。父松翁(一七九四〜一八六四)とともに、藩内における勤王党急進派の中心であった。
- (16) 都のこと。
- (17) 騒ぎどよめくさま。
- (18) 鹿の鳴く声。
- (19) 旅館のこと。
- (20) 松平容保。一八三五〜一八九三。会津藩主。文久二年、京都守護職となり、幕末の京都において尊皇攘夷派を抑える立場となった。戊辰戦争で敗れ、謹慎処分となる。
- (21) 同志のこと。
- (22) 会津藩兵のこと。
- (23) 動作などが角が立って他人と融和しない様。
- (24) 思い切って言うこと。
- (25) 旗を立ててほめる事。
- (26) 一八三〇〜一八六四。熊本藩士。林桜園に国学を、宮部鼎藏に山鹿流兵法を学ぶ。攘夷運動に身を投じ、熊本・水戸・長州の三藩が協同して尊皇攘夷を決行しようとしたが、熊本の藩論がまとまらず失敗。寺田屋の変で死亡。
- (27) 吉田稔麿。一八四一〜一八六四。萩の人。吉田松陰に学び、高杉・久坂とともに松下村塾の三秀と呼ばれた。池田屋の変において討死。
- (28) 久坂玄瑞のこと。

(29) 一八三八〜一八六四。土佐藩士。勝海舟について測量術・航海術を学び、日本各地を航行した。元治元年、海軍操練所を脱して京に上り同志と倒幕の計を進めたが、池田屋の変において鬪死した。

(30) (その一) 西郷隆盛の註13に既出。

(31) 実現を望んで長い間待ち続けた志。

(32) 一八二三〜一八六五。町人。山崎闇斎に私淑し、後に梅田雲濱の塾生となる。雲濱が安政の大獄に連座した際、その妻子を扶助したため幕吏の追及を受けた。また天誅組の義挙には軍資金を送るなどした。

(33) 小売店。

(34) 梅田雲濱のこと。

(35) にかわとうるしのように、親密で離れにくい関係の友。

(36) 欽心に同じ。

(37) 朝廷を支える器。

真木和泉

真木保臣、称和泉守、号紫灘。筑後国久留米邑、水天宮祠祝也。父曰旋臣。家世叙従五位、并和泉守。是為神職特例。保臣為人慷慨、嘗誦会沢正志『新論』、欽其為人、負笈抵水戸、為其弟子。既而帰郷、論時事上書藩主。得譴幽其弟大鳥居信臣家十余年。安政五年戊午春。幕府閣老堀田正篤上京、請開互市。保臣聞之、大憤慨。窃上封事於三条内大臣夷万。不暴于世而免焉。

文久二年壬戌。薩藩士大久保利通、自京師帰。路経筑後、保臣見之。事寢覚、藩議將禁錮之。遽逃亡、夜深入薩。其弟信臣亦逃。自料不免、乃屠腹。無幾島津久光上京。志士会於浪華、謁久光謀義挙。久光止之、徐除幕吏、恢復皇室、不聽。保臣適至。亦従其議。衆推保臣為首領。薩藩諸士、諫其過激敗事、押送筑後。而幽囚焉。明年己亥。有朝旨赦之。保臣自長門入京、出仕学習院。為公卿所礼遇。益感激尽力王事。三条公尤信任之。議既決、將託言行幸大和。移蹕函嶺、以正幕府之罪。事覺、毛利氏蒙譴、七卿西奔。保臣随行、常参帷幄。長兵之入京也、保臣与久坂元瑞等、俱為忠勇軍隊將、抛天王山。日詣石清水神祠祈攘夷功。而長藩老臣、不勝衆怒、遂率衆而進。来島政久等、將攻松平容保於闕下。保臣止之弗聽。因出兵応之。元瑞死之、保臣傷股、血流淋漓。不屈率衆走天王山自刃。年五十二。是為元治紀元甲子秋七月二十一日。明治元年戊辰。池尻某、為保臣等十七人、建石於宝寺塔前。五年。天皇賞保臣首唱大義、定賜祭資料。每歳十石云。保・信筑紫之雄也。不得際会風雲大行其志以死、不亦惜乎。

真木保臣、称は和泉守、号は紫灘。筑後国久留米邑、水天宮の祠祝なり。父は旋臣と曰ふ。家は世よ従五位、並びに和泉守に叙せらる。是れ神職の特例たり。保臣は人と為り慷慨にして、嘗て会沢正志(一)の『新論』(二)を読み、其の人と為りを、欽み、

笈(三)を負ひて水戸に抵り、其の弟子と為る。既にして郷に帰り、時事を論じて藩主に上書す。讒を得て其の弟大鳥居信臣の家に幽せらるること十余年。安政五年戊午春。幕府の閣老堀田正篤、京に上り、互市を開かんことを請ふ。保臣、之を聞きて、大いに憤慨す。窃に封事(四)を三条内大臣夷万(五)に上す。世に暴かれずして免がる。文久二年壬戌。薩藩士大久保利通(六)、京師より帰る。路、筑後を経、保臣、之に見ゆ。事寝覚(七)し、藩、議して將に之を禁錮せんとす。遽に逃亡し、夜深く薩に入る。其の弟信臣も亦逃ぐ。自ら免れざるを料り、乃ち腹を屠る。幾もなくして島津久光京に上る。志士、浪華に会し、久光に謁して義拳を謀る。久光之を止め、徐に幕吏を除き、皇室を恢復(八)せんとし聴かず。保臣適たま至る。亦其の議に従ふ。衆、保臣を推して首領と為す。薩藩諸士、其の過激にして事を敗るを諫め、押して筑後に送る。而して幽囚たり。明年己亥。朝旨ありて之を赦す。保臣、長門より京に入り、出でて学習院に仕ふ。公卿の礼遇する所と為る。益ます感激して王事に尽力す。三条公、尤も之を信任す。議既に決し、將に託言(九)して大和に行幸せんとす。移りて函嶺(一〇)に蹕して、以て幕府の罪を正さんとす。事覚はれ、毛利氏は讒を蒙り、七卿は西奔す。保臣、随行し、常に帷幄に参ず(一一)。長兵の京に入るや、保臣、久坂元瑞等と、俱に忠勇軍の隊將と為り、天王山に抛る。日、石清、水神祠に詣でて攘夷の功を祈る。而して長藩

の老臣、衆の怒るに勝へず、遂に衆を率いて進む。来島政久(一二)等、將に松平容保を闕下に攻めんとす。保臣、之を止むるも聴かれず。因りて兵を出して之に応ず。元瑞、之に死し、保臣も股を傷つけ、血流ること淋漓。屈せずして衆を率いて天王山に走り自刃す。年五十二。是れ元治紀元甲子秋七月二十一日たり。明治元年戊辰。池尻某、保臣等十七人の爲に、石を宝寺の塔の前に建つ。五年。天皇、保臣の大儀を首唱せしを賞して、定めて祭資料を賜ふ。毎歳十石と云ふ。保・信は筑紫の雄なり。際、風雲に会し、其の志を大に行ふを得ずして以て死するは、亦惜しからずや。

—註—

- (一) 会沢正志斎のこと。
- (二) 会沢正志斎の代表作で水戸学の經典としても重要視される。尊王攘夷を主張し、幕末の志士に大きな影響を与えた。ただし、倒幕・王政復古への展望はなく、あくまで幕府政治を肯定する立場(尊王敬幕)をとる。
- (三) 書物を入れる竹製の箱。
- (四) 機密のため密封して天子に差し出す意見書。
- (五) (その一) 徳川斉昭の註20に既出。
- (六) (その二) 西郷隆盛の註15に既出。
- (七) ここでは発覚する、の意。
- (八) 回復に同じ。
- (九) 他の言にかこつけて言う。

(10) 箱根山の事。

(11) 作戦や計画を行う場に参加していた、の意。

(12) 来島又兵衛。一八一六〜一八六四。萩藩士。高杉晋作が奇兵隊を組織した際、遊撃隊を組織し互いに応援を約した。元治元年には進発論を説き大坂に出軍。禁門の変において死亡。

平野次郎

平野次郎、名国臣。福岡藩士也。自幼好讀書、講武技。慕高山仲繩為人。嘗抵江戸、觀寛永・増上二寺壯麗有過禁闕、深慨皇威不振。安政初。遮藩主駕上意見書。殆見禁錮。聞幕府不奉攘夷勅、作歌曰、

斯久計惱流君能御心袁安美奉礼那四方能国人

蓋討幕之意、起於此時也。五年壬子。登京。与清水寺僧月照等糾合同志。幕吏探知督捕、遁抵薩摩、倚西郷隆盛。航海走日向。会隆盛・月照、相持投海。命棹夫援之。月照死、隆盛甦。二郎胆落、将自刃。為月照僕重助者所止。乃登陸、葬月照。變姓名入京。時閣老間部詮勝入朝、搜捕志士益嚴。謁近衛公、告月照顛末、呈其密書。公大喜。遂佯為商賈、奔下関匿白石正一郎家。往来肥・筑、始訪真木保臣。保臣以為間諜、辞以得譴屏居。二郎作歌示之。保臣一見以為非常人、乃和之出面、聞其所論。益感服、欲以己女配之。不從而去。抵肥後、寓官部鼎藏等家。可

一年。遇田中河内介・清川八郎等來勸義舉。謂之烏合、不敢從。

文久元年辛酉。再入薩。著『尊攘英断録』及『培覆論』。培覆言培王室覆幕府也。島津久光、覽而大嘉之、賜金十兩。乃去抵久留米、建石燈一基于高山仲繩墓前。和泉之将入京也、就伏見曇花院候人吉田重義上書、陳幕吏按廢帝旧例。天下義士、扼腕憤激之情、謂「速下詔、拔浪華城、屠二条城、火彦根城。使久光入京、掃蕩幕吏、解粟田宮幽囚、六師東征、以函嶺為行宮者、是為上策。而及中下策」。適聞藩主黒田斉博將覲幕府、次播州大倉谷。将見和泉沮義舉。斉博者久光之從王父也。与薩人伊牟田尚平往謁、陳義旅雲合之状、以促勤王。斉博大驚、称病遽歸。二郎復諫曰「今興義舉、則其忠烈。實為海内寡二。而託病歸藩、則必為世人所指目。自非他日奏偉功、不得雪此汚辱。若病状虛實、幕府必将探知之。彼有譴我而我不服、或動干兵。則是名不正而事不順矣。未如決志勤王、以鼓舞一藩人心也。且此舉雖使關東知之、毋傷也。僅僅數十百浪士、横行京・摂間、而幕吏無如之何。堂堂大藩、而上一致行事、安能抗之乎。今發使熊本・岡二藩以誘之。熊本有長岡佐渡。岡有中川土佐・小河一敏。彼皆主動王。将爭先來同。猶火就燥、水就濕。三藩合為一、連久留米・柳川、及山陽・南海諸藩、以朝京師。是兵法所謂「初如処女、後如脱兔者」。人将称今日虚病曰一時謀略也。此議一決、則臣雖不肖、請直上京、就列卿請綸旨、其為鎮西勤王之首唱。決不容疑矣。大凡兵貴拙速。藩祖龍光公遺訓有之。雖隻履而行、

神速則有功。伏願今日大駕帰藩、必期二十日再上洛」。奇博益驚。謂「若輩在他国、必釀奇禍」。命使扈從、抵赤馬関、逮捕之押送本国、繫諸獄舎。獄中禁用筆硯。因捻紙為縷作文字。著『尽忠録』二卷、『体勢弁』制蛮策』征寇説』囹圄集』神武必勝論』各一卷。字体巧妙、有雅致。見者莫不驚歎。其飯器有称信玄弁当者。拔己髮貼器底、製一弦琴作謡曲。寓獄中日長可樂之意。播琴音以破寂寥。明年三月。見釈。為徒罪課屬吏。先是、同志田中河内介・有馬新七等、皆為人殺。二郎独以在獄免。五月。上『保国策』一篇。陳守衛畿内一処、及連衛鹿兒島・中津・久留米三藩等策。八月。奉命上京、出仕學習院。会中山忠光率兵大和。奉命往鎮之。而朝議一變、諸公卿出奔長門。二郎遁至山陰。為幕吏追跡。踰山出播磨、抵周防、謁七卿。將応援大和。遂推沢宣嘉為首領。一隊十六人。以十月五日乘船発三田尻。八日。達播州塩浜。聞忠光敗而勢不可中止。十一日。夜襲生野官衙取之。遣使於京訴冤。翌日。伝檄國中、声幕吏專横、大徵兵食。諸藩聞之、出兵來攻。我兵見之、稍稍逃散。存者不過十余人。十四日。自山上馳下、從横疾闘、力尽自殺。二郎使宣嘉南走、身亦將遁去、為豊岡兵認知、奮闘殺傷數十人。竟見擒。敵兵檻致京師、繫六角獄。明年。長藩兵薄禁闕。幕吏恐二郎等脱走、出志士三十六人於獄、悉刎其首。国臣時年三十七。是為元治元年七月十九日。二郎真高山仲繩之流亞也哉。読其伝、使人或泣或笑。泣為二郎、笑由他人。嗚呼、其亦偉矣。

平野次郎、名は国臣。福岡藩士なり。幼きより読書を好み、武技を講ず。高山仲繩の人と為りを慕ふ。嘗て江戸に抵り、寛永・増上の二寺の壯麗なることの、禁闕に過ぐることを観、深く皇威の振はざるを慨す。安政の初。藩主の駕するを遮りて意見書を上す。殆ど禁錮せらる。幕府の攘夷の勅を奉ぜざるを聞きて、歌を作りて曰く、

かくばかり悩める君の御心を 安めまつれや四方の国人

蓋し討幕の意、此の時に起こるなり。五年壬子。京に登る。清水寺の僧月照等と同志を糾合す。幕吏に探知督捕せられ、遁れて薩摩に抵り、西郷隆盛に倚る。航海して日向に走らんとす。隆盛・月照の相持して海に投ずるに会ひ、棹夫に命じて之を援けしむ。月照は死し、隆盛は甦る。二郎胆落し、將に自刃せんとす。月照の僕重助なる者の止むる所と為る。乃ち陸に登り、月照を葬る。姓名を変じて京に入る。時に閣老間部詮勝(王)入朝し、志士を搜捕すること益ます嚴なり。近衛公(三)に謁し、月照の顛末を告げ、其の密書を呈す。公大いに喜ぶ。遂に伴りて商賈と為り、下関に奔りて白石正一郎の家に匿る。肥・筑に往来し、始め真木保臣を訪ぬ。保臣、以て間諜と為し、辞するに譴を得て屏居するを以てす。二郎、歌を作りて之に示す。保臣、一見して以て常人に非ずと為し、乃ち之に和して面を出し、

其の論ずる所を聞く。益ますまず感服し、己むすめの女をを以て之に配せんと欲す。従はずして去る。肥後に抵いたり、官部鼎蔵等の家に寓す。一年なるべし。田中河内介三・清川八郎等の来りて義拳を勧むるに遇ふ。之を烏合と謂ひ、敢て従はず。文久元年辛酉。再び薩に入る。『尊攘英断録』及び『培覆論』を著はす。培覆とは、王室をつちか培ひ幕府をくつが覆すことなり。島津久光、覽じて大いに之を嘉よしとし、金十両を賜ふ。乃ち去りて久留米に抵いたり、石燈一基を高山仲繩の墓前に建つ。和泉の將に京に入らんとするや、伏見の曇花院の候人三吉田重義に就きて上書し、幕吏の廢帝の旧例を按ずるを陳ぶ。天下の義士、扼腕憤激の情ありて、謂おもらく「速やかに詔を下して、浪華城を抜き、二条城を屠り、彦根城に火せん。久光をして京に入り、幕吏を掃蕩し、栗田宮三の幽囚を解き、六師もて東征し、函嶺を以て行宮三と為さしむるは、是れ上策たり。而して中下策に及ばん」と。適たまたま藩主黒田齊博三の將に幕府に覲まえんとし、播州大倉谷に次するを聞く。將に和泉に見え義拳を沮はまんとす。齊博は久光の從王父なり。薩人伊牟田尚平三と往きて謁し、義旅雲合三の状を陳べ、以て勤王を促す。齊博、大いに驚き、病と称して遽にはかに歸る。二郎、復た諫めて曰く「今、義拳を興せば、則ち其れ忠烈なり。実に海内寡二たり。而るに病に託して藩に帰れば、則ち必ず世人の指目一する所とならん。他日に偉功を奏するに非ざるよりは、此の汚辱を雪すぐを得ざらんや。病状の虚実のご

ときは、幕府、必ず將に之を探知せん。彼の我を謹せめて我の服さずんば、或いは干兵を動かさん。則ち是れ名正しからず事順ならざるなり。未だ志を勤王に決し、一藩人の心を鼓舞するに如かず。且つ此の拳は関東をして之を知らしむと雖も、傷ふことなきなり。僅僅数十百の浪士、京・摂の間に横行して、幕吏は之を如何ともするなし。堂堂たる大藩にして、上下一致して事を行へば、安なんぞ能く之に抗せんや。今、使を熊本・岡の二藩に發して以て之を誘へ。熊本に長岡佐渡二あり。岡に中川土佐一・小河一敏一あり。彼皆勤王を主とす。將に先を争ひて来り同ともにせん。猶ほ火の燥に就き、水の湿に就くがごとし。三藩の合して一と為らば、久留米・柳川、及び山陽・南海の諸藩を連ねて、以て京師に朝せん。是れ兵法の所謂「初めは処女の如く、後には脱兔の如き者一」なり。人は將に今日の虚病を称して一時の謀略なりと曰はん。此の議、一たび決すれば、則ち臣は不肖なりと雖も、請ただちに京に上り、列卿に就きて繪旨一を請ひ、其の鎮西の勤王の首唱と為らんことを。決して疑ひを容れざれ。大凡おおよそ兵は拙速なるを貴ぶ。藩祖龍光公一の遺訓にも之れあり。隻履一にして行くと雖も、神速なれば則ち功あり。伏して願はくは、今日大駕して藩に帰るとも、必ず二十日を期して、再び上洛せられんことを」と。齊博、益ます驚く。謂おもらく「若輩の他国に在らば、必ず奇禍を醸さん」と。命じて扈從せしめ、赤馬関に抵いたりて、遽にはかに之を捕へ、本

国に押送し、諸を獄舎に繋ぐ。獄中、筆硯を用いるを禁ぜらる。因りて紙を捻りて縷を為り文字を作す。『尽忠録』二卷、『体勢弁』『制蛮策』『征寇説』『囹圄集』『神武必勝論』各おの一卷を著はす。字体巧妙にして、雅致あり。見る者、驚歎せざるはなし。其の飯器を信玄弁当と称する者あり。己の髪を抜きて器の底に貼り、一弦の琴を製りて謡曲を作る。獄中は日長きも之を樂しむべきの意を寓す。琴の音を播きて以て寂寥を破る。明年三月。釈さる。徒罪課の属吏と為る。是より先、同志田中河内介・有馬新七等、皆人に殺さる。二郎、独り獄に在るを以て免る。五月、『保国策』一篇を上す。畿内の一処を守衛し、及び鹿兒島・中津・久留米の三藩等を連衡するの策を陳ぶ。八月。命を奉じて京に上り、学習院に出仕す。中山忠光の兵を大和に挙ぐるに会ふ。命を奉じて往きて之を鎮めんとす。而るに朝議一変し、諸公卿、出でて長門に奔る。二郎、遁れて山陰に至る。幕吏に追跡せらる。山を踰へ播磨に出で、周防に抵り、七卿に謁す。將に応じて大和を援けんとす。遂に沢宣嘉(19)を推して首領と為す。一隊十六人。十月五日を以て船に乗り三田尻を発す。八日。播州塩浜に達す。忠光の敗るるを聞くも、勢、中止すべからず。十一日。夜、生野の官衙(20)を襲ひて之を取る。使を京に遣りて冤を訴ふ。翌日。檄を国中に伝へ、幕吏の専横を声し、大いに兵食を徹す。諸藩、之を聞き、兵を出して来り攻む。我が兵、之を見て、稍稍逃散す。存する者は十余人に過ぎず。十四日。山上より馳せ下り、従横疾闘するも、力尽き自殺す。二郎は宣嘉をして南走せしめ、身も亦將に遁去せんとす

るも、豊岡兵に認知せられ、奮闘殺傷すること数十人。竟に擒とせらる。敵兵、檻して京師に致し、六角獄に繋ぐ。明年。長藩兵、禁闕に薄る。幕吏、二郎等の脱走するを恐れ、志士三十六人を獄より出して、悉く其の首を刎ぬ。国臣、時に年三十七。是れ元治元年七月十九日たり。二郎は真に高山仲繩の流亜(21)なるかな。其の伝を読めば、人をして或いは泣き或いは笑はしむ。泣くは二郎の為にして、笑ふは他人に由る。嗚呼、其れ亦偉なり。

—註—

(1) (その一) 徳川公斉昭の註18に既出。

(2) (その二) 僧月照の註3に既出。

(3) (その二) 梅田雲濱の註16に既出。

(4) 道路で賓客を案内する役人。あるいは敵情を探る斥候。

(5) (その二) 僧月照の註26に既出。

(6) 天子が行幸して泊まる仮御所のこと。

(7) 黒田長濬(ながひろ)。一八一〜一八八七。福岡藩主。ペリーの来航に際し、開国を主張し攘夷を排斥。蘭学を好み、藩士に西洋砲術・航海術などを学ばせた。公武合体に務め、慶応元年には勤王派藩士の大弾圧を行った。

(8) 一八三〜一八六八。薩摩藩士。島津斉彬の侍医に医学を学び、後、長崎で蘭学を学んだ。安政元年、脱藩して田中河内介・桜任藏らと交わる。ヒュースケンを斬った一人。その他、安藤信正襲撃を謀るなどした。

慶応三年には江戸の薩摩屋敷を根拠地として幕府を挑発し、武力倒幕のきっかけを作った。

(9) 多くの人が集まること。

(10) 指さして見ること。人目を引くこと。

(11) 長岡是容(これかた)。一八三三〜一八七一。称に老岐。熊本藩家老。

実学党の横井小楠と親交があり、徳川斉昭・藤田東湖・佐久間象山・吉田松陰・西郷隆盛・大久保利通らとも交友があつた。佐渡は同藩の政敵松井佐渡との混同であろう。

(12) 中川栖山。一八二五〜一八七一。岡藩家老。勤王派として同藩の小河

一敏らとともに国事に奔走した。文久年間には九州の勤王浪士を集め、島津久光を推して事を挙げようとしたが失敗。隠居禁固に処せられた。

(13) 一八一三〜一八八六。岡藩士。幕末期は勤王派として真木和泉・平野

国臣らと尊皇攘夷を唱え、西郷隆盛らと国事を談ずるなどした。また維新後は堺県知事・宮内大丞を経た後、太政官・宮内省などに仕出した。

(14) 『孫子』九地篇に「始めは処女の如くんば、敵人戸を開き、後に脱兎の如くんば、敵拒むに及ばず」とある。

(15) 天子のことば。

(16) 黒田長政のこと。一五六八〜一六二三。安土桃山時代の武将で、豊臣

秀吉没後は徳川家康に従い、関ヶ原の戦いでは東軍に大きく貢献した。その功によって筑前一国を与えられた。

(17) 履き物を片方しかはいていないこと。

(18) 風流なおもむきのこと。

(19) 一八三五〜一八七三。公家。三条実美や天下の志士と交わって攘夷を唱えていたが、八・一八の政変により長州へ下ることとなった。その際、

平野国臣らが天誅組に呼応しようとし、ともに生野に挙兵した。維新後は参与・長崎県知事・外国官知事。外務卿などを歴任した。

(20) 役所のこと。

(21) 同じ流れをくむ人。

有馬新七

文久中、尊攘之論大起、壮士雲合響應、殺身無所回顧。後人笑其過激。而未得謂之非正義者、其誠使然也。若有馬新七等、不其然乎。有馬新七、名正義。新七其称。鹿兒島藩士也。父曰榊四郎兵衛。出継有馬氏後。四郎兵衛死、正義承之。少壯遊江戸。修關齋学、善詩歌達劍術。安政五年戊午。外人來謁將軍約貿易。天皇震怒、別勅水藩攘夷。新七聞之、慨然与同志謀、將奏関東事情、除姦吏攘夷狄、以達藩主斉彬之宿志。与藩人日下部伊三次・水藩人鮎沢伊大夫・江戸人勝野豊作俱西上。聞西郷吉之助・海江田武次・伊地知壮之丞三人、在四条客舎、往訪之。吉之助招其友僧月照見新七。新七細書時事示月照。月照呈之近衛左大臣。遂供御覽。新七感激告月照。「勅諭諸藩、誅除幕府姦吏」。月照大然之、説左大臣、与吉之助謀。将使新七奉勅書写本、如江戸、達土佐・越前二藩。会月照避難西奔、遽告別赴関東。

先是、京都田中河内介・出羽清川八郎・筑前平野次郎・肥後宮部鼎藏・久留米真木和泉等、前後入薩摩。因屢通密書、謀埃島津久光上京舉事。至是、新七与越前橋本左内・長門山県半藏會議方略。無何日下部・橋本就縛。乃曰「遷延不決、我党無遺類矣。縱除井伊、猶有間部・酒井等在」。因与常陸桜任藏窃入京、欲訪大久保要於大坂。任藏聞幕府跡要甚急、勸新七歸藩候機會。新七從之。乘船会風起未發。復間行入京、將刺間部詮勝。不果。聞藩主修理大夫由海路到伏見。往獻一封討幕攘夷不通。受命歸國。陰与田中謙助等謀、日夕揣摩弗措。文久二年。島津久光、將上京以繼先君遺志。時新七及謙輔等、侍左右將命。多藩士來訪者。争欲扈從。扈從者一千余人。自海路行。四月十日。達大坂。久光分兵為二。留一隊于大坂以備不虞、命一隊隨行。十三日。達伏見、遂入京。先是、西郷吉之助上京、寓其藩邸。衆欲推之為首領。藩議不聽、送還吉之助。衆大憤、欲果其志益急。時諸藩浮浪激烈之徒數十人、来往大坂藩邸、屢面密計。清川八郎、遲其議決、罵曰「是何因循也」。將挺身舉事。朝廷聞而大憂之。懇諭久光鎮之。久光恐惶奉命、欲以一死謝之。辞色並決。侍臣察知、而他人伝聞焉、奔走抑制甚力。先是、江戸祇役之士柴山愛次郎・弟子丸龍助・橋口伝藏・伊集院直右衛門等、報其老臣島津等、脫江戸還大坂。至是与新七・謙助等合謀。先襲關白九条氏、除所司代酒井氏、合朝幕為一、以果攘夷之舉。西郷新吾・大山弥助・篠原冬一郎等、皆決死贊之。報諸各藩同志。

為留守居某所探知、終達久光耳。而事既決、不可中止也。二十三日味爽。柴山・橋口・伊集院・弟子丸等九人、自中島逆旅發。新七及田中・西郷・篠原・是枝等二十七人、自藩邸發。皆乘船溯淀川。久光聞之、命奈良原喜左衛門・海江田武次往諭之。二人下淀、見是枝万助等于船。喜左致命不聽。喜左大怒、欲斬之共死、謂君命重、懇諭歸報。久光命小松帶刀鎮之。帶刀伝命奈良原幸五郎・江夏仲左衛門・道島五郎兵衛・山口金之進・鈴木昌之助・鈴木勇右衛門・大山格之助・森岡善助八人、分道馳赴。久光更諭之曰「吾受命鎮撫浪士。假令我藩一士党之、將有何辭謝罪、有拒命者首足異所」。幸五等受命而出。抵伏見淀橋。知新七一行会於寺田号客棧。直赴之請面新七。橋口伝藏、醉臥楼上。勵声曰「無有矣。有馬新七、抑請見者誰」。江夏・森岡二人、聞之曰「是必詐也」。直登樓、没階而窺。衆將出。頗雜踏。見新七・謙助・愛次郎等團欒而坐。謂之曰「諸君有用談。請下樓來。用談猶云公務」。愛次郎曰「果用談也、則往矣」。徐徐下樓。新七・壯助・謙助亦接踵而下。幸五伝久光命。「急抵錦小路邸面陳」。且語時勢与久光意中。曰「此舉決意中止」。新七等固執不聽。言涉過激、有大声叫者。曰「事既至茲。何論是非」。道島五郎兵衛、直呼上意、斫謙助眉間。眼球迸出即斃。山口金之進、勵声叱咤、斫愛次郎肩。愛次郎挺受其刃。愛次郎名道隆。攻苦修文武。嘗歎皇室式微、登霧島山、潔齋七日。以祈國家安寧。先是、語同志以不抗上意。至是死。果如其言。新七見之大怒、拔刀擊五郎。

交闘三四反。互負傷。新七刀折、不暇拔副刀。手搏五郎、庄之壁、大呼曰「与予併刺」。有応声而貫之者。二人俱斃。新七、時年三十八。而楼上人、曾不之知也。聞紛擾声、不知有何變異。弟子丸龍助下階。大山格之助、自下斫其腰。創弥重不屈、拳刀与数人格闘。斃乱刃中。橋口伝藏継下、格之助横撃其足。伝藏直前赴之、転踏終見殺。西田直五郎亦下。上床敬藏、執槍自下突之。乃仆。森山新五左衛門上階將出、聞争闘声、直横刀向之。身負數十創而仆。橋口壯助奮闘、負深創、自肩及乳。氣息將絶、見幸五在前。請一杯水。幸五汲而与之。壯助欣然曰「我輩雖死、尚有卿等在。毫無遺憾天下之事。幸善謀焉」。言畢而暝。時事起倉卒、旅客狼狽欲争先遁走。粉呪殊甚。美玉三平在後房聞之、以為「伏見奉行、使捕手来困」。大呼曰「敵兵至矣。宜縱火快戰」。拳坐大驚。吉田清右衛門・西郷新五・伊集院直右衛門・篠原冬一郎等二十五人、斉起携刀劍、將突出。柴山龍五郎、先之欲下階。格之助・幸五郎等、植血刃在其下。如埃諸士至者。幸五抵掌連呼龍五曰「吾奉君命来此。姑且緩之。若有意見、宜謁公上陳」。衆聞之、如毫不省者。幸五左右袒、棄其兵合掌曰「諸君猶疑予言乎。請速応之。不可有他」。龍五郎曰「然則与同志詳議矣」。言未畢、西郷・伊集院二人、委刀而下。幸五等喜形於面。諸士見之稍安。各就坐合議。或曰「屠腹謝罪」、或曰「謁公具陳意見」。紛紜不決。真木和泉・田中河内介二人、自別階升、坐稠衆中諭之曰「久光公欲与諸君共大事、而今失其期。不可復為也。不如

謁公謝之」。衆以為然。是夜齊發伏見謁久光。叩頭謝罪。請隨行東下、不聽。護送薩摩、命謹慎。闕止之時、謙助蘇生。直五・新五二人亦尋蘇。明日罰違命賜死。謙助等使自刃。謙助乃洗眉間血、拜京師、謝勤王無功、更拜藩主、屠腹而終。新五左衛門亦如之。山本四郎為島津氏重臣関山糺家人。藩法陪臣有罪、例捕縛之。是日見輕率数人至、拔小刀抗之、傷一二人屠腹而伏。輕率將縛之。横目付土田某謂「其死于王事也。載竹輿舁之送至藩邸」。在途死。翌日遂葬新七等八人於大黒寺。新七為人痘痕满面、色頰黒、而性豪邁、不為物屈。自幼抱勤王志、罵督幕政、無所忌憚。人称曰今高山云。烏呼、新七諸人、皆一時豪士。敢抗君命、豈無所見哉。奉君命殺之亦出於不得已。要之莫非憂國精神所在。比諸伴食宰相、媚外客、保寵祿、揚揚有得色者、奚啻天淵相懸。自君子觀之、必有任其責者焉。若諸人所為、未可以過激毀之也。

文久中。尊攘の論大いに起り、壯士、雲合響應し、身を殺して回顧する所なし。後人、其の過激なるを笑ふ。而れども未だ之を正義に非ずと謂ふを得ざるは、其の誠の然らしむればなり。有馬新七等のごときも、其れ然らざらんや。有馬新七、名は正義。新七は其の称。鹿兒島藩士なり。父は榊四郎兵衛と曰ふ。出でて有馬氏の後を継ぐ。四郎兵衛死し、正義、之を承く。少壯、江戸に遊ぶ。關齋工の学を修め、詩歌を善くし、劍術に達

す。安政五年戊午。外人来りて將軍に謁し貿易を約さしむ。天皇震怒し、別に水藩③に攘夷を勅す。新七、之を聞き、慨然として同志と謀り、將に關東の事情を奏し、姦吏を除き、夷狄を攘ひ、藩主斉彬の宿志を達せんとす。藩人日下部伊三次④・水藩の人鮎沢伊大夫⑤・江戸の人勝野豊作⑥と俱に西上す。西郷吉之助・海江田武次⑦・伊地知壮之丞⑧の三人、四条の客舎に在ると聞きて、往きて之を訪ぬ。吉之助、其の友僧月照を招きて新七に見えしむ。新七、時事を細書して、月照に示す。月照、之を近衛左大臣に呈す。遂に御覽に供す。新七感激し、月照に告ぐ。「諸藩に勅諭して、幕府の姦吏を誅し除かん」と。月照、大いに之を然りとし、左大臣に説き、吉之助と謀る。將に新七をして勅書の写本を奉じて江戸に如き、土佐・越前の二藩に達せしめんとす。月照の難を避けて西奔するに會ひ、遽に別を告げて關東に赴く。是より先、京都の田中河内介・出羽の清川八郎・筑前の平野次郎・肥後の官部鼎藏・久留米の真木和泉等、前後して薩摩に入る。因りて屢しば密書を通じ、謀りて島津久光の京に上り事を挙ぐるを諒つ。是に至りて、新七、越前の橋本本左内・長門の山県半藏⑨と會して方略を議す。日下部・橋本の縛に就くに、何ともするなし。乃ち曰く「遷延して決せずんば、我が党遺類⑩なからん。縦ひ井伊を除くとも、猶ほ間部・酒井⑪等の在るあり」と。因りて常陸の桜任藏⑫と窃に京に入り、大久保要⑬を大坂に訪ねんと欲す。任藏、幕府

の跡い要むることの甚だ急なるを聞きて、新七に藩に歸りて機會を諒つを勸む。新七、之に従ふ。船に乗るも風の起るに會ひて未だ発せず。復た間行⑭して京に入り、將に間部詮勝を刺さんとす。果せず。藩主修理大夫⑮の海路に由りて伏見に到るを聞く。往きて一封を獻じて討幕攘夷せしめんとするも通ぜず。命を受けて国に帰る。陰に田中謙助等と謀り、日夕揣摩⑯して措かず。文久二年。島津久光、將に京に上り以て先君の遺志を継がんとす。時に新七及び謙輔等、左右に侍して命を將つ。藩士の来訪する者多し。争ひて扈從⑰せんと欲す。扈從する者、一千余人。海路より行く。四月十日。大坂に達す。久光、兵を分ちて二と為す。一隊を大坂に留めて以て不虞⑱に備へ、一隊に命じて随行せしむ。十三日。伏見に達し、遂に京に入る。是より先、西郷吉之助、京に入り、其の藩邸に寓す。衆、之を推して首領と為さんと欲す。藩、議して聴かず、吉之助を送還す。衆、大いに憤り、其の志を果さんと欲し、益ます急なり。時に諸藩の浮浪激烈の徒數十人、大坂の藩邸に来往し、屢しば密計を画す。清川八郎、其の議の決するを遅しとし、罵りて曰く「是れ何ぞ因循なるや」と。將に身を挺して事を挙げんとす。朝廷聞きて大いに之を憂ふ。懇ろに久光に諭して之を鎮めしめんとす。久光、恐惶して命を奉じ、一死を以て之に謝せんと欲す。辞色並びに決す。侍臣察知して、他人をして焉を伝聞せしめ、抑制に奔走せしむるに甚だ力む。是より先、江

戸祇役の士柴山愛次郎(18)・弟子丸龍助(19)・橋口伝蔵(20)・伊集院直右衛門(21)等、其の老臣島津等に報じて、江戸を脱し大坂に還る。是に至りて新七・謙助等と合して謀る。先に関白九条氏(22)を襲ひ、所司代酒井氏を除き、朝幕を合して一と為し、以て攘夷の挙を果さんとす。西郷新吾(23)・大山弥助(24)・篠原冬一郎(25)等、皆死を決して之に賛す。諸藩の同志に報ず。留守居某の探知する所と為り、終に久光の耳に達す。而れども事既に決し、中止すべからざるなり。二十三日昧爽。柴山・橋口・伊集院・弟子丸等九人、中島逆旅より発す。新七及び田中・西郷・篠原・是枝(26)等二十七人、藩邸より発す。皆、船に乗りて淀川を溯る。久光之を聞き、奈良原喜左衛門(27)・海江田武次に命じて往きて之を諭さしむ。二人、淀を下り、是枝万助等を船に見る。喜左、命を致すも聴かず。喜左、大いに怒り、之を斬りて共に死せんと欲すも、君命の重きを謂ひて、懇ろに諭して帰り報ず。久光、小松帯刀(28)に命じて之を鎮めしむ。帯刀、命を奈良原幸五郎(29)・江夏仲左衛門(30)・道島五郎兵衛(31)・山口金之進(32)・鈴木昌之助(33)・鈴木勇右衛門(34)・大山格之助(35)・森岡善助(36)の八人に伝え、道を分ちて馳せ赴く。久光、更に之に諭して曰く「吾、命を受けて浪士を鎮撫す。仮令我が藩の一士の之を覚し、將に何かの辞ありて謝罪あらんも、命を拒む者は首足所を異にす」と。幸五等、命を受けて出づ。伏見の淀橋に抵る。新七一行の寺田号客棧に会するを

知る。直に之に赴きて新七に面するを請ふ。橋口伝蔵、酔ひて楼上に臥す。声を励まして曰く「あることなし。有馬新七、抑も見ゆるを請ふ者は誰ぞ」と。江夏・森岡の二人、之を聞きて曰く「是れ必ず詐ならん」と。直に楼に登り、階に没して窺ふ。衆將に出づ。頗る雑踏す。新七・謙助・愛次郎等の団欒して坐するを見る。之に謂ひて曰く「諸君、談を用するあり。請ふ、楼を下りて来れ。談を用するは猶ほ公務を云ふがごとし」と。愛次郎曰く「果して談を用するや、則ち往かん」と。徐徐として楼を下る。新七・壮助・謙助も亦踵を接して下る。幸五、久光の命を伝ふ。「急ぎ錦小路の邸に抵り面陳せよ」と。且つ時勢と久光の意中とを語る。曰く「此の挙は中止を決意せよ」と。新七等、固執して聴かず。言、過激に涉り、大声して叫ぶ者あり。曰く「事既に茲に至る。何ぞ是非を論ぜん」と。道島五郎兵衛、直に上意と呼し、謙助の眉間を研る。眼球迸び出で即ち斃る。山口金之進、声を励まして叱咤し、愛次郎の肩を研る。愛次郎、挺ちて其の刃を受く。愛次郎、名は道隆。攻苦して文武を修む。嘗て皇室の式微(37)するを歎じ、霧島山に登り、潔斎すること七日。以て国家の安寧を祈る。是より先、同志に以て上意に抗せざるを語る。是に至りて死す。果して其の言の如し。新七、之を見て大いに怒り、刀を抜きて五郎を撃つ。交ごも闘ひて三四たび反す。互ひに負傷す。新七の刀折れ、副刀を抜く暇あらず。五郎を手搏し、之を壁に圧して、大呼して

曰く「予と与に併びに刺せ」と。声に応じて之を貫く者あり。二人俱に斃る。新七、時に年三十八。而して楼土の人、曾て之れ知らざるなり。紛擾の声を聞くも、何の変異あるかを知らず。弟子丸龍助、階を下る。大山格之助、下より其の腰を斫る。創弥いよ重きも屈せず、刀を挙げて数人と格闘す。乱刃の中に斃る。橋口伝蔵、継いで下り、格之助、其の足を横撃す。伝蔵、直に前みて之に赴くも、転踏し、終に殺さる。西田直五郎も亦下る。上床敬蔵、槍を執りて下より之を突く。乃ち仆る。森山新五左衛門は膚(38)に上り、將に出でんとし、争闘の声を聞きて、直に横刀して之に向ふ。身、数十創を負ひて仆る。橋口壮助、奮闘するも深創を負ひ、肩より乳に及ぶ。氣息將に絶へんとするに、幸五の前に在るを見る。一杯の水を請ふ。幸五汲みて之に与ふ。壮助欣然として曰く「我輩死すと雖も、尚ほ卿等の在るあり。毫も天下の事に遺憾なし。幸いに善く謀らんことを」と。言畢りて瞑す。時に事の倉卒に起り、旅客狼狽して先を争ひて遁走せんと欲す。粉吶(39)すること殊に甚だし。美玉三平は後房に在りて之を聞き、以為らく「伏見奉行、捕手をして来り困ましむ」と。大呼して曰く「敵兵至る。宜しく火を縦ちて快戦すべし」と。坐を挙げて大いに驚く。吉田清右衛門・西郷新五・伊集院直右衛門・篠原冬一郎等二十五人は、斉しく起ちて刀劍を携へ、將に突出せんとす。柴山龍五郎、之に先んじて階を下らんと欲す。格之助・幸五郎等、血刃を植

てて其の下に在り。諸士の至る者を俟つが如し。幸五、掌を抵して龍五に連呼して曰く「吾、君命を奉じて此に来る。姑く且に之を緩やかにせよ。若し意見あらば、宜しく公に謁して上陳すべし」と。衆、之を聞くも、毫も省みざる者の如し。幸五、左右祖し、其の兵を棄てて合掌して曰く「諸君猶ほ予の言を疑ふか。請ふ速かに之に応ぜよ。他あるべからず」と。龍五郎曰く「然らば則ち同志と詳議せん」と。言未だ畢らずして、西郷・伊集院の二人、刀を委ねて下る。幸五等の喜び面に形はる。諸士、之を見て稍安んず。各おの坐に就きて合議す。或いは「腹を屠りて謝罪せん」と曰ひ、或いは「公に謁して、具に意見を陳べん」と曰ふ。粉紘として決せず。真木和泉・田中河内介の二人は、別階より升起、稠衆(40)の中に坐して之を論して曰く「久光公は諸君と大事を共にせんと欲するも、今は其の期を失す。復た為すべからざるなり。公に謁して之を謝するにしかず」と。衆、以て然りと為す。是の夜、斉しく伏見を發して久光に謁す。叩頭して謝罪す。東下に随行せんと請ふも聴かれず。薩摩に護送せられ、謹慎を命ぜらる。闘ひ止む時、謙助蘇生す。直五・新五の二人も亦尋いで蘇す。明日、命に違ふを罰せられて死を賜はる。謙助等、自刃せしめらる。謙助乃ち眉間の血を洗ひ、京師に拝して勤王の功なきを謝し、更に藩主に拝して腹を屠りて終はる。新五左衛門も亦之の如し。山本四郎(41)は島津氏の重臣関山 紘の家人たり。藩法に陪臣に罪あれば、例と

して之を捕縛す。是の日、軽率数人の至るを見て、小刀を抜きて之に抗し、一二人を傷つけて腹を屠りて伏す。軽率、將に之を縛らんとす。横目付土田某謂ふ「其れ王事に死するなり。竹輿に載せて之を昇^かぎて藩邸に送り至さん」と。途に在りて死す。翌日遂^{つひ}に新七等八人を大黒寺に葬る。新七は人と為り満面に痘痕あり、色頰^{てい}黒^く(⁴)にして、性豪邁、物の為に屈せず。幼きより勤王の志を抱き、幕政を罵詈し、忌憚する所なし。人称して今高山と曰ふと云ふ。烏呼^{あゝ}、新七諸人、皆一時の豪士なり。敢て君命に抗ふも、豈に見る所なからんや。君命を奉じて之を殺すも亦已むを得ざるに出づ。之を要するに憂国の精神の在る所非ざるはなし。諸伴食の宰相の、外客に媚び、寵祿を保ち、揚々として得色^{とくしき}(⁴)ある者に比ぶれば、奚^{なん}ぞ畜^ただ天淵相懸^{へん}たる。君子より之を觀れば、必ず其の責に任ずる者あり。諸人の為す所のごときは、未だ過激を以て之を毀^そるべからざるなり。

—註—

(1) 山崎闇齋。一六一八〜一六八二。江戸前期の儒者・神道学者・谷時中に朱子学を学び、後、神儒一致を唱え垂加神道を創始した。佐藤直方・三宅尚齋・浅見綱齋の崎門三傑などを輩出した。

(2) 水戸藩のこと。

(3) (その二) 梅田雲濱の註25に既出。

(4) 一八二四〜一八六八。水戸藩士。安政五年、日下部伊三治宅にて有馬新七と会見し、国事に関して意見を交わしたが、両藩提携の拳兵には至

らなかった。同六年には安政の大獄に連座して終身禁固となった。後、武田耕雲齋に属して西上するなどした。

(5) 一八〇九〜一八五九。幕臣阿部四郎五郎に仕え、藤田東湖・安島帯刀・梅田雲濱・頼三樹三郎らと親交があった。大老井伊直弼の専断を論難し、安政の大獄の際、搜索されることとなった。逃亡中病死した。

(6) 有村俊斎のこと。(その二) 僧月照の註6に既出。

(7) 伊知地貞馨(さだか)。一八二六〜一八八七。薩摩藩士。昌平黌に学ぶ。久光の公武合体運動を助けて、江戸藩邸留守などをつとめた。維新後は外務省に出仕した。

(8) 穴戸璣(たまき)。一八二九〜一九〇一。萩の人。明倫館に学び、明倫館祭酒山県太華の養子となった。後、安積良斎の門に入る。藩世子の侍読となり、世子の機務に参与した。幕末期は長州のため諸国を奔走し、維新後は明治政府の要職を歴任した。

(9) 生き残っている人々。

(10) (その二) 金子孫二郎の註6に既出。

(11) 一八一二〜一八五九。水戸藩士。藤田東湖の門に入り、西郷隆盛や吉田松陰と交わった。大阪に潜伏し時機を待っていたが病死した。

(12) 一七九八〜一八五九。土浦藩公用人。竹中澹齋・平山潜に兵学を学び、藩校郁文館の武館長・兵学教授となった。藤田東湖・会沢正志齋と交わる。安政の大獄において永押込に処せられ、獄死した。

(13) ひそかに行くこと。

(14) 島津久光のこと。(その二) 佐久間象山の註14に既出。

- (15) 推し量つてあてようとする事。
- (16) 天子の乗り物の供をすること。
- (17) 予期しない出来事のこと。
- (18) 一八三六〜一八六二。薩摩藩士。橋口壮助と親しく、文久二年ともに大坂へと至り、有馬新七等と寺田屋に会し、事変にあつて死亡した。
- (19) 一八三八〜一八六二。薩摩藩士。西郷隆盛を尊信して勤王討幕に奔走。文久二年、久光の上京を聞き、西田直五郎と大坂に至り、寺田屋事変にあつて死亡。
- (20) 一八三二〜一八六二。薩摩藩士。安井息軒に学ぶ。江戸藩邸記録所の書記となつた。橋口壮助らと大坂に至り、寺田屋事変にあつて死亡。
- (21) 伊集院兼寛。一八三八〜一八九八。薩摩藩士。寺田屋事変に参加し謹慎となつたが、以後、薩英戦争・戊辰戦争に参加。維新後は海軍に出仕し、元老院議員・貴族院議員などを務めた。
- (22) 九条尚忠(ひさただ)。一七九八〜一八七一。公家。安政五年の条約勅許問題に際し、幕府側について尽力した。そのため尊王攘夷派の憤激をまねき、文久二年辞職。重慎を命じられ出家した。
- (23) 西郷従道。一八四三〜一九〇二。薩摩藩士。通称は信吾。西郷隆盛の実弟。明治以降、日本の陸海軍の創設に貢献した。台湾出兵・西南戦争に参加。後に海相・内相などを歴任した。
- (24) 大山巖。一八四二〜一九一九。薩摩藩士。西郷隆盛の従弟。寺田屋事変に参加したため謹慎となつたが、翌年の薩英戦争に参加。以後、洋式操練を学ぶため黒田清隆らと江戸に出る。鳥羽伏見の戦い。会津戦争などに参加。維新後は陸軍卿をつとめ、日清・日露両戦争には司令官として出征した。
- (25) 篠原国幹のこと。(その一) 西郷隆盛の註17に既出。
- (26) 是枝万助。生卒年不詳。薩摩藩士。有馬新七らとともに従士中の激派。寺田屋事変後は鹿児島へ贈られ謹慎となつた。
- (27) 一八三一〜一八六五。薩摩藩士。文久二年、久光の上京に随行し、有村俊斎とともに有馬新七等過激派の鎮撫にあたつたが失敗に終わった。同年の生麦事件の際、リチャードソンに斬りつけ、事件の端緒を作つた人物でもある。
- (28) 一八三五〜一八七〇。薩摩藩家老。島津久光の側近で、大久保利通とともに公武合体運動を推進した。慶応二年は西郷隆盛とともに薩長同盟を結び、徳川慶喜に大政奉還を進言するなどした。
- (29) 奈良原繁。一八三四〜一九一八。薩摩藩士。奈良原喜左衛門の弟。吉田屋事変において有馬新七ら過激派を鎮撫。薩英戦争にも参加した。維新後は高官を歴任した。
- (30) 一八三一〜一八七〇。薩摩藩士。寺田屋事変には鎮撫使として参加。また禁門の変には隊長として参加している。慶応二年から英米に留学し、明治二年に帰国するも、翌年死亡。
- (31) ?〜一八六二。薩摩藩士。寺田屋事変には鎮撫使として参加。有馬新七と斬り合い、新七とともに死亡。唯一鎮撫使側で死亡した。
- (32) 山口鉄之助。一八三一〜一八六八。薩摩藩士。寺田屋事変には鎮撫使として参加。後、薩英戦争・戊辰戦争に参加。越後高田にて戦死。

(33) 生卒年不詳。薩摩藩士。寺田屋事変には鎮撫使として参加。

(34) 生卒年不詳。薩摩藩士。寺田屋事変には鎮撫使として参加。

(35) 大山綱良。一八二五〜一八七七。薩摩藩士。寺田屋事件において上意討ちにあたったほか、薩英戦争・長州との討幕出兵盟約・戊辰戦争等で功績をあげる。維新後、鹿児島県令となるが、西南戦争の際、西郷軍に協力したため死罪となった。

(36) 生卒年不詳。薩摩藩士。寺田屋事変には鎮撫使として参加。

(37) 国勢などが甚だしく衰えること。

(38) 未詳。

(39) 入り乱れている様。

(40) 多くの人々のこと。

(41) 一八二三〜一八六二。薩摩藩士。文久二年、脱藩して大坂へ行き、諸藩の志士と交わった。病にたおれ、京都の藩邸に療養中、寺田屋事変が起こり、事件に連座して帰国の命に接したが、これに服せず、使者数名と戦って切腹した。

(42) 赤黒いこと。

(43) 得意気な顔つきのこと。

中山公子忠光

自有霸府以来、公卿子孫、袖手旁觀、無一人堪將兵者。靡靡艷歌終身。拳世咎之。至安政中、乃有中山公子忠光・姉小路公

知等。皆豪邁過人。而忠光尤為優異也。忠光者、正二位大納言

忠能第三子也。加冠叙從四位下、任侍從。幼有文武才幹。好義

俠、広与四方志士交好。絶無纨绔子弟之態。文久三年癸亥冬。

脱走長門、潜匿白石正一郎家。告父請絶、繳納官位。与兵卒伍、

擊外舶于壇浦。衆賞其驍勇。未幾帰京。時朝議、将幸大和遂攘

夷狄。為松本衡・吉村重郷等所推、挈壯士三十余人而発。八月

十五日。赴大坂、抵常安橋逆旅、艤快艇二隻、載兵器彈藥、称

勅使先驅、赴長州。解纜出天保山外。遽命指泉州。遭風順船駛。

海月照映。衡高声唱曰

海乃面月乃伊佐与布間毛侍須

忠光乃応曰

波耶乘奴計与木津川乃口

衆聞之大振。因称天忠組。截警投海中。忠光頒軍令、有言曰「諸軍、毎朝、遙拜伊勢太廟及京師禁省、一心誓報国家之恩。勿得貪貨財、奸婦女、放火神祠仏宇、私殺降人、懷私怨相棄捐」。遂達界港。入伝舎理装、直向河内。次早遣吉村重郷・尾崎孝基於狭山軍營。実北条相模守所戍。属相模守臥病、使老臣二人出接。重郷曰「天皇幸大和、且親征。吾曹募義兵迎鳳輦。請出援。今夕当宿甲田村水郡長雄家。請来陳貴意」。乃去。投長雄宅。製菊

章旗等、及夜深将発。相州老臣、馳至曰「扈從親征。不敢後矣」。

十七日。詣村上帝陵于観心寺。拝楠左中将首塚。献幣物以禱戰

捷。是日、藤本真金率同志自陸路来会。聞五条代官鈴木源内素

嘗貪暴。率衆襲之。源内逃。上田政則跟捕、島義親刎其首。池定勝・森下茂時等遞進、捕元締長谷川岱助以下四人斬之、縱火于庁、退次櫻井寺。入夜伴林光平等亦尋至。翌日梟源内等首于五条駅外。榜示曰「鳴三百年之私義、蔑開關以來之天恩、辱國家助夷狄」。遂召近傍村長等、諭討幕旨、免今年田租。徵糧於三歲村。適學習院出仕平野国臣、伝廷臣旨、來戒輕舉。忠光書意見、命鶴田道德從国臣入京以聞。既而朝廷遽聽幕吏執奏、黜諸公卿言尊攘者、停毛利氏禁門護衛、稱親征非上意。京師守護職松平容保、令諸藩討忠光。稱乱賊矯詔。忠光將抵十津川謀後舉。遇安積武貞・岡見經成等二十余人來援。二十日。命池定勝等六人留守五条、乘夜至坂本。翌日。抛天之川要害、差衡・重郷等於高取・十津川・高野各處、徵金穀募兵士。容保恐衆蜂起、命京尹諭示四郷、捕斬忠光党。而土豪野崎主計等、応忠光募、率農兵一千二百人來會。高野僧徒亦來呈誓書。勢頗振。二十五日。郡山・和歌山二藩兵、進抵御所。高取城主植村駿河守、違約拋城、不敢輸糧。忠光怒。二十六日早旦。砲銃齊發而進。忽斃數人。山蹊險絶、進退不便。敵發石榴彈、我軍潰退。次天之川。二十八日。聞尊攘議息。我軍負朝敵名。會衆議將航西南。高取・郡山・彦根・和歌山兵、自四面來蹙。九月九日。森下茂時等十五人、与十津川銃兵十人、夜襲彦根軍于下市、大破之。敵軍狼狽潰走。十五日。敵勢又合、自三面奄至。彈丸雨注。我軍不支、放火次舍、走次長殿村。無復為後拒者。十九日。踰玉

置山至紀州本宮。險峻不可言。二十一日。橋本綱幸、教導至撰之白川村。遇津兵遮攔。燒棄兵器、踰伯母峠。二十四日暮。過厨子口。彦根・和歌山兵來圍。忠光挺身突入敵陣、斬二人、傷七八人。潰圍而過。從者十余人。磨之使散去、期再會。自左山中行。欲与死者、上田正則等七人。出入深翳、攀緣巖洞。二十五日。竄伏陰崖幽谷之間。時從高処遠覘、砲声殷殷達耳終日。入夜踰宇陀間道、曉達三輪山。潛匿民家。二十七日。踰河内・大和兩界之嶺、亭午達大坂、入長門藩邸。日晡、乘漁舟、掛席遁抵長門豐浦。元治元年甲子十一月五日。病卒。或曰歿之也。或曰遇刺。未知孰是。年二十二。藩主葬遺骸于綾羅木村、立祠祭之。明治三年十月五日。朝廷詔停父子義絶、復官位如故、贈正四位、賜祭資料三百円。烏呼、尊王討幕之說、其所由來者久矣。能實踐之、使世注想、開關以來之天恩者、莫先於公子。公子勇義成性。自祖考遺傳使然。雖有輕舉之失、出於疾邪之甚、其有功於皇室亦大矣。安政中。余在京師。聞公子豪邁不群、欲侍講讀。或謂其暴悍不可親暱者。假令薰陶得其人、以保其身、則其策勳、豈止於是哉。或身為皇室姻戚、首唱大義、而其位不過正四位。使媚愚民阿外客、保祿固寵臣妾生光者視之、豈不愧且死哉。中山氏臣田中綏猷、本但馬人小森某子。登京為田中近江介義子、配其女。稱河内介。叙正六位。嘗与志士謀攘夷、恐累及主家。見忠光陳意見辭職隱居、遂巡九州、遊說甚力。當島津久光入朝、走浪華、隱于薩摩邸、飛檄九州。大会同志、將襲

関白九条氏、以清君側。滿朝恐懼、命久光鎮撫之。久光斬其藩士八人、余皆押送其國。綏猷見護抵薩。在途為人殺。亦一時之豪也。忠光告父請絶、繳納官位。蓋有感於綏猷等。賞勳局賞之、止於如此。比諸姉小路公知主攘夷、使幕府責其違臣礼、巡摂海敵守備、為客所刺、天皇震悼、贈參議右近衛權中將者、果何如也。當時從公子殉難者甚多。往往贈位。有那須重民。本土佐巨室深尾氏家臣浜田某三子。身長六尺、長武技。与吉村重郷唱尊攘、為同志所推、刺參政吉田元吉、遁去登京。遂從忠光与重郷等同死。特旨叙從四位。今宮内大臣田中子光顯叔父云。

霸府ありしより以来、公卿の子孫、袖手旁觀して、一人も堪へて兵を將ひきいる者なし。靡靡として艶歌して身を終ふ。世を挙げて之を咎とがむ。安政中に至り、乃ち中山公子忠光・姉小路公知(一)等あり。皆ともに豪邁なること人に過ぐ。而して忠光は尤も優異たり。忠光は正二位大納言忠能の第三子なり。冠を加へしとき從四位下に叙せられ、侍從に任ぜらる。幼くして文武の才幹あり。義侠を好み、広く四方の志士と好よしみを交かわす。絶えて純袴(三)子弟の態なし。文久三年癸亥冬。脱して長門に走り、潜みて白石正一郎の家に匿る。父に告げて絶を請ひ、官位を繳納(三)す。兵卒と伍し、外舶を壇浦に撃つ。衆、其の驍勇(三)を賞す。未だ幾いくばくならずして京に帰る。時に朝議、將に大和に幸し遂すなはち夷狄を攘はんとす。松本衡(五)・吉村重郷(五)等の推す所と為り

て、壯士三十余人を撃たずへて發す。八月十五日、大坂に赴き、常安橋の逆旅に抵いたり、快艇二隻を艤し、兵器彈藥を載せ、勅使と稱して先驅し、長州に赴かんとす。纜ともしなを解きて天保山の外に出づ。遽にはかに命じて泉州を指す。風の順なるに遭ひて船駛はやし。海月照り映ゆ。衡、高声もて唱して曰く

海の面に月のいざよふ間も待たず

と。忠光乃ち応じて曰く

はや乗りゆけよ木津川の口

と。衆、之を聞きて大いに振ふ。因りて天忠組(七)と稱す。警もとどりを截ちて海中に投ぐ。忠光、軍令を頒しきて、言ありて曰く「諸軍、毎朝、遙かに伊勢太廟及び京師の禁省を拝し、一心に国家の恩に報ずるを誓へ。貨財を貪り、婦女を奸し、神祠仏宇に放火し、私に降人を殺し、私怨を懷きて相棄捐するを得ることなかれ」と。遂つひに界港(八)に達す。伝舎に入りて装ととのを理へ、直ただちに河内に向ふ。次早(九)、吉村重郷・尾崎孝基(九)を狭山の軍營に遣る。実は北条相模守(十)の成りし所なり。相模守の病に臥すに属し、老臣二人をして出でて接せしむ。重郷曰く「天皇、大和に幸し、且つ親征せんとす。吾が曹は義兵を募りて鳳輦(二)を

迎ふ。請ふ出でて援けよ。今夕は当に甲田村の水郡長雄の家に宿すべし。請ふ来りて貴意を陳べられんことを」と。乃ち去る。長雄宅に投ず。菊章の旗等を製り、夜の深きに及びて將に発せんとす。相州の老臣、馳せて至りて曰く「親征に扈從せん。敢て後とならず」と。十七日。村上帝(12)陵に觀心寺に詣づ。楠左中将(13)の首塚に拜す。幣物を献じて以て戦捷(14)を禱る。是の日、藤本真金(15)、同志を率いて陸路より来り会す。五条の代官鈴木源内(16)の素より嘗て貪暴なるを聞く。衆を率いて之を襲ふ。源内逃ぐ。上田政則(17)跟(18)ひ捕へ、島義親(17)、其の首を刎ぬ。池定勝(18)・森下茂時(19)等、遞(20)りて進み、元締長谷川岱助(20)以下四人を捕へて之を斬り、火を庁に縦ち、退きて桜井寺に次す。夜に入りて伴林光平(21)等も亦尋いで至る。翌日。源内等の首を五条駅外に梟す(22)。榜示して曰く「三百年の私義を鳴らし、開闢以来の天恩を蔑し、国家を辱めて夷狄を助く」と。遂(23)に近傍の村長等を召して、討幕の旨を諭し、今年の田租を免す。糧を三歳村に徴す。適(24)たま学習院出仕平野国臣、延臣の旨を伝へ、来りて輕拳を戒む。忠光、意見を書して、鶴田道徳(25)に命じて国臣に従ひて京に入り以て聞(26)せしむ。既にして朝廷(27)遽(28)に幕吏に聴きて奏を執り、諸公卿の尊攘を言ふ者を黜(29)けて、毛利氏の禁門護衛を停め、親征は上意に非ずと称す。京師守護職松平容保、諸藩をして忠光を討たしむ。乱賊と称して詔を矯む。忠光、將に十津川に抵(30)り後拳を謀らんとす。

安積武貞(31)・岡見経成(32)等二十余人の来り援するに遇ふ。二十日。池定勝等六七人に命じて五条に留守せしめ、夜に乗じて坂本に至る。翌日、天之川の要害に抛りて、衛・重郷等を高取・十津川・高野の各処に差し、金穀を徴し兵士を募る。容保、衆の蜂起するを恐れ、京尹に命じて四郷に忠光党を捕斬せよと諭す。而して土豪野崎主計(33)等、忠光の募に応じ、農兵一千二百人を率いて来り会す。高野の僧徒も亦来りて誓書を呈す。勢、頗る振ふ。二十五日。郡山・和歌山二藩の兵、進みて御所に抵(34)る。高取城主植村駿河守、約に違ひて城に抛り、敢て糧を輸せず。忠光怒る。二十六日早旦。砲銃斉発して進む。忽ち数人を斃(35)す。山蹊險絶にして、進退便ならず。敵、石榴弾(36)を發し、我が軍潰退す。天之川に次す。二十八日。尊攘の議息むと聞く。我が軍、朝敵の名を負ふ。衆を会して議し、將に西南に航せんとす。高取・郡山・彦根・和歌山の兵、四面より来り蹙(37)る。九月九日。森下茂時等十五人、十津川の銃兵十人と、彦根軍を下市に夜襲し、大いに之を破る。敵軍狼狽して潰走す。十五日。敵勢又合し、三面より奄(38)に至る。彈丸雨のごとく注ぐ。我が軍支えず、火を次舎に放ち、走りて長殿村に次す。復た後と為りて拒む者なし。十九日。玉置山を踰えて紀州の本宮に至る。險峻なること言ふべからず。二十一日。橋本綱幸(39)、教導(40)して摂の白川村に至る。津兵の遮攔(41)するに遇ふ。兵器を焼き棄て、伯母峠を踰ゆ。二十四日暮。厨子口を過ぐ。彦根

・和歌山の兵、来り囲む。忠光、身を挺して敵陣に突入し、二人を斬り、七八人を傷つく。囲みを潰して過ぐ。従ふ者十余人。之に磨さしまねきて散去せしめ、再会を期す。左の山中より行く。与に死せんと欲する者、上田正則等七人。深巒しんらんに出入し、攀りて巖洞に縁る。二十五日。陰崖いんがい幽谷の間に竄伏す。時に高処より遠く、峴うかがふに、砲声殷殷として耳に達し日を終ふ。夜に入りて宇陀の間道を踰えて、曉、三輪山に達す。民家に潜み匿る。二十七日。河内・大和両界の嶺を踰え、亭午、大坂に達し、長門藩邸に入る。日晡、漁舟に乗り、掛席して遁れて長門豊浦に抵いたる。元治元年甲子十一月五日。病にて卒す。或いは之に歎す(31)と曰ふなり。或いは刺(32)に遇ふと曰ふ。未だ孰いづれか是なるを知らず。年二十二。藩主、遺骸を綾羅木村に葬り、祠を立てて之を祭る。明治三年十月五日。朝廷、詔して父子の義の絶たるるを停し、官位を復すること故の如くし、正四位を贈り、祭資料三百円を賜ふ。烏呼、尊王討幕の説、其の由りて来る所の者久し。能く之を實踐し、世をして注想せしめ、開關以来の天恩ある者は、公子に先ずるものなし。公子は勇義性と成る。祖考(33)より遺伝して然らしむるなり。軽拳の失あり、疾邪の甚だしきに出づと雖も、其の皇室に功あるも亦大なり。安政中。余、京師に在り。公子の豪邁にして不群なるを聞きて、講誦に侍らんと欲す。或いは其の暴悍(34)にして親暱(35)すべからずと謂ふ者あり。仮令たとひ薰陶の其の人を得、以て其の身を保つと

も、則ち其の策勲、豈に是に止まらんや。或いは身は皇室の姻戚にして、大義を首唱するも、其の位は正四位に過ぎず。愚民に媚び外客に阿おもねりて、禄を保ち寵を固くする臣妾の光を生ずる者をして之を視しめて、豈に愧ぢ且つ死せざらんや。中山氏の臣田中綏猷(36)は、本但馬の人小森某の子なり。京に登りて田中近江介(37)の義子と為り、其の女むすめを配す。河内介と称す。正六位に叙せらる。嘗て志士と攘夷を謀るも、累の主家に及ぶを恐る。忠光の意見を陳べて職を辞し隠居するを見て、遂つひに九州を巡り、遊説甚だ力つとむ。島津久光の朝に入るに当り、浪花に走り薩摩邸に隠れ、檄を九州に飛ばす。大いに同志を会し、將に関白九条氏を襲ひ、以て君の側を清めんとす。滿朝恐懼し、久光に命じて之を鎮撫せしむ。久光、其の藩士八人を斬り、余は皆其の国に押送す。綏猷は護られて薩いんに抵いたる。途に在りて人に殺さる。亦一時の豪なり。忠光は父に告げて絶を請ひ、官位を繳納す。蓋し綏猷等さうごうらうに感ずることあらん。賞勲局、之を賞するも、此の如きに止まる。諸これを姉小路公知の攘夷を主とし、幕府をして其の臣礼に違ふを責め、摂海を巡りて守備を嚴にせしめ、客の刺す所と為り、天皇震悼して、参議右近衛権中将を贈るに比すれば、果して何如ぞや。当時、公子に従ひて難に殉ずる者、甚だ多し。往往として位を贈らる。那須重民(38)あり。本土佐の巨室深尾氏の家臣浜田某の三子なり。身長六尺、武技に長ず。吉村重郷と尊攘を唱へ、同志の推す所と為りて、

参政吉田元吉(39)を刺して、遁去して京に登る。遂に忠光に従ひて重郷等と共に死す。特旨ありて従四位に叙せらる。今の宮内大臣田中子光頭(40)の叔父なりと云ふ。

—註—

(1)一八三九〜一八六三。公家。日米通商条約締結の勅許不可、久光の幕政改革意見書の採用などに関わり、三条実美とともに廷臣中の急進派・

尊攘派の中心的存在であった。文久三年、刺客に襲われ死亡。

(2)白い絹のはかま。贅沢な衣服のこと。

(3)役所に返納すること。

(4)強くて勇ましいこと。

(5)松本奎堂。一八三一〜一八六三。刈谷藩士。天誅組総裁。尾張藩儒奥

田桐園に学び、後に昌平黌に学ぶ。藤本鉄石や吉村寅太郎とともに天

誅組を組織するも、政変によって形勢が急変し、吉野にて自刃。

(6)吉村寅太郎。一八三七〜一八六三。土佐の人。武市瑞山の勤王党に参

加した。寺田屋事変に関係し、土佐に送還されて禁獄となる。出獄後、

大和に挙兵したが戦死。

(7)天誅組に同じ。

(8)翌朝のこと。

(9)尾崎健蔵。一八四一〜一八六四。鳥取藩士。藤本鉄石らと交わり、天

誅組に入る。鉄石の十津川挙兵に参加するも、捕らえられ六角獄におい

て殺害された。

(10)北条氏恭(うじゆき)。一八五四〜一九二九。河内狭山藩主。下野佐

野藩主堀田正衝の二男で、文久二年に襲封。大政奉還後はいち早く恭順した。

(11)天子の乗る車のこと。

(12)実際は後村上帝。

(13)楠木正成。？〜一三三六。南北朝時代の武将。後醍醐天皇の鎌倉幕府討伐に参加。建武の新政により、摂津・河内・和泉の三国を守護した。

後、足利尊氏が離反し、湊川の戦いで戦死した。

(14)戦勝に同じ。

(15)藤本鉄石。一八一六〜一八六三。岡山藩士。天保一〇年、脱藩して京に入り、後、諸国を巡って各地の志士と交わった。文久三年、吉村寅太

郎らと謀り、中山忠光を奉じて天誅組を起こし総裁となった。大和に挙

兵し、戦死した。

(16)？〜一八六三。五条代官。文久二年に着任。天誅組の襲撃に遭い、長

谷川岱助らとともに斬られた。

(17)島浪間(なみま)。一八四三〜一八六五。土佐藩士。文久三年、藩命

で上京し三条実美の衛士となった。天誅組の挙兵に参加するも破れ、同

志と中山忠光を擁して三田尻に逃れ、忠勇隊に入る。元治元年、忠勇隊

として禁門の変に参加するも破れた。後、同志を得るため上京する際、

賊徒と誤認され死亡した。

(18)池内蔵太。一八四一〜一八六六。土佐藩士。安井息軒に学び、諸藩の

志士と交流。武市瑞山とともに土佐勤王党の結成に尽力した。脱藩の後、

長州藩の遊撃隊参謀となり、下関攘夷・天誅組の義挙・禁門の変などに

加わっている。坂本龍馬が亀山社中を結成した後はそのれに入社し、龍馬とともに海軍創設に尽力した。航行中、遭難して死亡。

(19) 森下幾馬。一八三四〜一八六三。土佐藩士。勤王党に参加し、後、天誅組の拳兵に兄の儀之助とともに加わる。戦死。

(20) 長谷川泰助。？〜一八六三。五条代官元締手代。

(21) 一八一三〜一八六四。僧侶・歌人・国学者。天誅組の変に際し、軍参謀兼記録方となり、十津川郷兵やその他に檄文を發して人を集めた。追討の兵に抗したが、敗走の途中捉えられ斬死に処せられた。

(22) さらに首にすること。

(23) 鶴田陶司。一八四〇〜一八六四。久留米藩士。文久二年、同志と脱藩して大坂に至り、島津久光を迎えて京都に入るも、寺田屋事案にあつて、藩へ護送、禁固となった。後、中山忠光の義拳を聞いて参加。とらえられ六角獄にて斬られた。

(24) (その二) 梅田雲濱の註23に既出。

(25) 岡見留次郎。一八四二〜一八六四。水戸の人。文久元年、高輪の英国仮公使館を襲った後、長州・土佐の志士と交わる。大和の拳兵に加わるも、捉えられ六角獄で斬られた。

(26) 一八二四〜一八六三。十津川郷士。梅田雲濱の教えを受け、諸国の志士と交わる。文久三年、天誅組に依りて十津川郷士の一隊長となつて各所を転戦したが、朝議の急変により他へ禍が及ぶことを恐れて自殺した。

(27) 着発弾（着弾すると同時に爆発する弾丸）のこと。

(28) 橋本若狭。一八二二〜一八六五。神職。文久三年、天誅組の変が起

ると、郷党を説いてこれに投じ、軍議において貢献したが、捕らえられて六角獄に繋がれ斬死した。

(29) もと郷導に作る。

(30) さえぎること。

(31) 毒殺されること。

(32) 刺客のこと。

(33) 死んだ祖父。

(34) 性質や素行が荒々しいこと。

(35) 親愛すること。

(36) 田中河内介のこと。(その二) 梅田雲濱の註16に既出。

(37) 中山忠能の家臣。詳細については不詳。

(38) 一八二九〜一八六三。土佐藩士。坂本龍馬と交わり、武市瑞山に従つて勤王党に参加。吉田東洋を暗殺した後、京坂において国事に奔走した。天誅組の拳兵に参加し、戦死。

(39) 吉田東洋。一八一八〜一八六二。土佐藩士。参政として後藤象二郎・板垣退助・福岡孝弟ら新人を登用し、藩政改革を行った。階級制度の改革や文武世襲の廃止など、進歩的な政策を打ち出していたが、勤王党の過激な尊王攘夷論と対立し、暗殺された。

(40) 一八四三〜一九三九。土佐藩士。武市瑞山に師事して剣術を修め、勤王党に参加。元治元年、脱藩して長州へ行き、高杉晋作の知遇を受ける。薩長同盟の周旋に協力した。維新後は高官の職を歴任している。

川上弥一

也卓馬有

自殺與殺人、皆出於禦侮之志。而不能殺人、則為人所殺者、世多此例。言之可為酸鼻。如川上弥一、知為人所殺、而自殺不敢殺一敵人。不可謂勇且仁哉。弥一者、長州藩士也。名正義。為人豪勇有氣節。夙唱尊攘大義、欲致身報國。文久三年癸亥、代高杉晋作為奇兵隊長。砲擊夷艦有功。聞中山忠光舉兵大和、欲応援之。与平野国臣議、推沢主水正宣嘉為大將。十月二日。乘舟。八日。達播州塩浜、聞忠光敗、衆欲歸去。正義与戸原卯橘持不可、欲招忠光殘兵、且募但・丹志士。主水正以為然。乃合三十余人抵但馬・生野、拋延応寺。弥一改姓名曰南八郎。取諸唐張巡「南八、男兒死耳。不可為不義屈」之語也。十一日。舉旗山口村、襲生野代官所。会代官川上伊太郎不在。命吏員尽遁去、遂取之、定為駐軍所。広募兵食、免今年田租。国臣後二日、至是日来会。翌日命市人製菊章軍幕・提燈等。有浪士劍客数百人。将行取丹馬入京、訴七卿及長侯父子冤。幕府命姫路・明石諸藩追討。諸藩兵自四面來蹙。我軍出戰、多望風遁去者。弥一等奮戰不屈。十四日。国臣等会衆議進退。弥一奮然作色曰「我輩舉事而為幕府討。固当然耳。事勢至此、安得喪胆驚惶。且夫今次之舉、予已決議。事成必復親征攘夷之議、不成橫屍原野。今也大和失守、幕兵奄至。是固吾輩宜死之秋也。拋命力戰、伝芳名於千載、不亦愈快乎」。議乃決。弥一与卯橘別從農兵、拋山口村妙

見堂。既而山城明清寺僧宗行、与但馬人高橋孝太郎・多田弥太郎・肥後人旭竹史・阿波人深尾源治郎等、從主水正潛匿。国臣等為敵驅散、自間道逃去。弥一等十二人、盤掘其地、不敢退一步。須臾敵大至。農兵望見遽反覆、自山頂亂墜大石。我兵進退維谷、欲快戰而死。弥一止之曰「吾輩十一人、敢当前後大敵。死乎士民之手、恥莫大焉。不若自刃以為攘夷先登」。交杯訣飲。卯橘呼曰「我乞為黄泉之東道」。乃屠腹。弥一曰「余為諸君介錯。且為諸君殿」。介錯謂助自尽也。衆聞之、一時伏劍。弥一悉殞其首畢、剗刀于腹、更自刎而死。年二十一。其十一人、曰戸原卯橘、曰中条熊太郎、曰長野熊之丞、曰下瀬熊之進、曰井関英助、曰伊藤百合五郎、曰白石廉作、曰小田村信之進、曰久富豊、曰和田小伝次、曰西村清太郎。卯橘、名繼明。秋月藩士。家業医。嘗為木下業広弟子、又入塩谷世弘門。受命蟄居、広論時事上之。乘夜脱走至此。熊太郎、名基好。出石藩士。常誦「尽忠報国」四字。請父上京遂志不聽。乃遺書于家、去仕姊小路少将。当少将遇刺、拔刀逐賊傷之。抱少将而歸。朝廷賜白銀五枚。遂從主水正于此。廉作、名資敏。赤間閩豪商正一郎資風之弟。往來薩摩六次。上言時勢、薩侯感賞、托糧米四万石、供緩急用。当島津久光上京、傾家產營弁費用。保庇中山忠光、極其懇篤。久坂通武砲擊美人、常与通武同烈戰。高杉晋作編奇兵隊、首入其伍。以致国人來集至家。告破産、毫無回顧。藩侯賞之進列士籍。其余皆長藩人。与正義同功一体者也。高杉晋作、嘗追惜弥一与吉

村重郷、作詩弔之曰、

知己從來懷二君

繫囚不得并双墳

日東正氣冠天地

休説張巡与霽雲

其末書曰「重郷類張巡、正義類霽雲。然二子節義、固非巡・雲之所及也」。重郷、土佐人。慷慨憂世、広与志士交。説島津久光以挙義兵、与有馬新七等密議。事覚、薩人伝朝命、送致其国。後復上京、与松本奎堂・藤本鉄石、擁中山忠光挙兵大和不克、自屠而死云。烏呼、当時人心固執攘夷如此。無一転移之術而欲压制之。压制不息、繼以誅斬。是徳川氏之所以一敗不振也。弥一等、不殺敵而自殺。敵人莫不感歎。久之其名益著、其有功于皇政復古者大矣。

自殺と殺人とは、皆、悔を禦するの志より出づ。而して人を殺すあたはずんば、則ち人の殺す所と為るは、世よ此の例多し。之を言ふに酸鼻(一)と為すべし。川上弥一(二)の如きは、人の殺す所と為るを知りて、自殺して敢て一敵人も殺さず。勇且つ仁と謂ふべからざらんや。弥一は、長州藩士なり。名は正義。人と為り豪勇にして気節(三)あり。夙に尊攘の大義を唱へ、身を致して国に報せんと欲す。文久三年癸亥。高杉晋作に代りて奇兵隊長と為る。夷艦を砲撃して功あり。中山忠光の兵を大和に挙ぐるを聞き、応じて之を援けんと欲す。平野国臣と議して沢主水正宣嘉を推して大将と為す。十月二日。舟に乗る。八日。播

州塩浜に達するに、忠光の敗るるを聞き、衆、帰り去らんと欲す。正義と戸原卯橋(四)とは持して不可とし、忠光の残兵を招き、且に但・丹の志士を募らんと欲す。主水正、以て然りと為す。乃ち三十余人を合して但馬・生野に抵り、延応寺に拠す。弥一は姓名を改めて南八郎と曰ふ。諸(五)を唐の張巡(六)の「南八、男児死すのみ。不義の為に屈すべからず」の語に取るなり。十一日。旗を山口村に挙げ、生野代官所を襲ふ。会(七)たま代官川上伊太郎(八)は不在なり。吏員に命じて(九)尽(十)く遁去せしめ、遂に之を取り、定めて駐軍所と為す。広く兵食を募り、今年の田租を免す。国臣、後(十一)るること二日にして、是の日に至り来り会す。翌日、市人に命じて菊章の軍幕・提燈等を製せしむ。浪士劍客数百人あり。将に行きて丹馬を取り京に入りて七卿及び長侯父子の冤を訴へんとす。幕府、姫路・明石の諸藩に命じて追討せしむ。諸藩兵、四面より来り(十二)蹙(十三)る。我が軍、出で戦ふも、風を望みて遁去する者多し。弥一等、奮戦して屈せず。十四日。国臣等、会して進退を衆議す。弥一、奮然として色を作して曰く「我輩、事を挙ぐるも幕府に討たる。固(十四)より当に然るべきのみ。事勢此に至り、安(十五)ぞ喪胆驚惶するを得んや。且つ夫れ今次の挙は、予め已に議を決す。事成れば必ず親征攘夷の議に復し、成らずんば屍を原野に横たふるのみ。今や大和に守を失ひ、幕兵(十六)奄(十七)ち至る。是れ(十八)固(十九)に吾輩の宜しく死すべき(二十)秋(二十一)なり。命を抛(二十二)ちて力戦し、芳名を千載に伝ふるは、亦愈快ならずや」と。議乃ち決す。弥

一は卯橋と別れて農兵に従ひ、山口村の妙見堂に拠る。既にして山城の明清寺の僧宗行と、但馬の人高橋孝太郎(三)・多田弥太郎(四)、肥後の人旭竹史、阿波の人深尾源治郎等と、主水正に従ひて潜匿す。国臣等は敵に駆散せられ、間道より逃去す。弥一等十二人、其の地に盤拠(五)し、敢て一步も退かず。須臾にして敵大いに至る。農兵、望見して遽(六)に反覆し、山頂より大石を乱墜す。我が兵、維谷に進退し、快戦して死せんと欲す。弥一、之を止めて曰く「吾輩十一人、敢て前後の大敵に当る。土民の手に死するは、恥の焉(七)より大なるはなし。自刃して以て攘夷の先登と為るにしかず」と。交杯して訣飲す。卯橋、呼びて曰く「我乞ひて黄泉の東道(八)と為らん」と。乃ち腹を屠る。弥一曰く「余、諸君の為に介錯せん。且に諸君の為に殿せん」と。介錯とは自ら尽くすを助くるを謂ふなり。衆、之を聞きて、一時に劍に伏す。弥一、悉(九)く其の首を殞(十)し畢(十一)り、刀を腹に刺し、更に自刎して死す。年二十一。其の十一人は、曰く戸原卯橋、曰く中条熊太郎(二)、曰く長野熊之丞(三)、曰く下瀬熊之進(四)、曰く井関英助(五)、曰く伊藤百合五郎(六)、曰く白石廉作(七)、曰く小田村信之進(八)、曰く久富豊(九)、曰く和田小伝次(一〇)、曰く西村清太郎。卯橋は、名は継明。秋月藩士。家は医を業とす。嘗て木下業広の弟子と為り、又塩谷世弘(二〇)の門に入る。命を受けて蟄居し、広く時事を論じ之を上す。夜に乗じて脱走し此に至る。熊太郎は、名は基好。出石藩士。常に「尽

忠報国」の四字を誦す。父に請ひて京に上り志を遂げんとするも聴かれず。乃ち書を家に遺し、去りて姉小路少将に仕ふ。少将の刺に遇ふに当りては、刀を抜きて賊を逐ひ之を傷つく。少将を抱きて帰る。朝廷、白銀五枚を賜ふ。遂(二一)に主水正に此に従ふ。廉作は、名は資敏。赤間関の豪商正一郎資風(二二)の弟なり。薩摩に往来すること六次。時勢を上言し、薩侯感賞し、糧米四万石を托し、緩急の用に供せしむ。島津久光の京に上るに当り、家産を傾けて営弁資用す。中山忠光を保庇すること其の懇篤なるを極む。久坂通武(二四)の美人に砲撃するや、常に通武(二五)と同一に烈戦す。高杉晋作の奇兵隊を編するや、首に其の伍に入り、以て国人を致して来り集め家に至らしむ。破産を告げらるるも、毫も回顧することなし。藩侯、之を賞し進めて士籍に列す。其の余は皆長藩人なり。正義と功を同じくすること一体なる者なり。高杉晋作、嘗て弥一と吉村重郷とを追惜し、詩を作りて之を弔ひて曰く、

知己 從來 二君を懐う

繫囚 双墳を并するを得ず

日東の正気 天地に冠たり

説くを休めよ 張巡と霽雲(二二)とを

其の末書に曰く「重郷は張巡に類し、正義は霽雲に類す。然し

て二子の節義は、固^{まこと}に巡・雲の及ぶ所に非ざるなり」と。重郷は、土佐の人。慷慨して世を憂ひ、広く志士と交はる。島津久光に説きて以て義兵を挙げしめ、有馬新七等と密議す。事覚はれ、薩人、朝命を伝へ、送りて其の国に致さしむ。後復、京に上り、松本奎堂(22)・藤本鉄石(24)と、中山忠光を擁して兵を大和に挙ぐるも克てず、自ら屠りて死すと云ふ。烏呼^{あゝ}、当時の人心の攘夷に固執すること此の如し。一も転移の術なくして之を压制せんと欲す。压制息まず、継ぐに誅斬を以てす。是れ徳川氏の一敗して振はざる所以なり。弥一等、敵を殺さずして自殺す。敵人、感歎せざるはなし。之を久しくして其の名は益^{ます}ます著はれ、其の皇政復古に功ある者の大なることあり。

一註

- (1) いたみ悲しむこと。
 (2) 通常は彌市と表記される。
 (3) 気骨があり正義を守る志があること。
 (4) 一八三五〜一八六三。秋月藩士。木下業広・塩谷宕陰に学ぶ。尊王論を唱え、久光上京に際し呼応しようとしたが失敗。国許で幽閉された。後、脱藩して長州に走り、沢宣嘉とともに生野で挙兵した。自刃。
 (5) 唐の人。安禄山の乱に兵を起こして之を討ち、睢陽の太守許遠とともに城を守って戦った。後、賀蘭進明に救いを求めたが、進明が援軍を出さなかつたため、城が陥ち殺された。以下は、張巡が南八男(霽雲)を

激励した言葉。

- (6) 川上猪太郎。一八二七?。生野代官。
 (7) 高橋甲太郎。一八二四〜一八六七。出石藩士。昌平龔に学ぶ。文久三年、脱藩して七卿を奉じて長州に至り、沢宣嘉の生野義拳に使番として参加した。破れた後、長州へ逃れ、奇兵隊に加わる。第二次長州征伐において戦死。
 (8) 一八二六〜一八六四。出石藩士。藤沢東咳・古賀洞庵に学び、ついで昌平龔に学ぶ。藩校弘道館の教授となった。後、海防に志し、長崎にて高島秋帆に西洋砲術を学ぶ。生野義拳に参加し捕らえられ、護送中に刺殺された。多数の著述を遺している。
 (9) しつかりと深く根をはって勢力を保つこと。
 (10) 東道主と同意で案内人のこと。
 (11) 中条右京。一八四三〜一八六三。出石藩士。姉公路家用人格。尊皇攘夷を唱えて国事に奔走し、文久三年、沢宣嘉に従って長州に下り、生野挙兵に参加した。長州に逃げる途中、士民の銃弾にあたり自決。
 (12) 一八四二〜一八六三。萩藩士。藩校明倫館に入り、寺島忠三郎・下瀬熊太郎らと深く交わった。文久三年、奇兵隊に入り、下関攘夷に参加。後、七卿を三田尻に守衛し、沢宣嘉を推して生野で挙兵した。山口村妙見山にて切腹。
 (13) 一八四三〜一八六三。萩藩士。明倫館に入り、長野熊之允・寺島忠三郎らと交わる。奇兵隊に入り、下関攘夷に参加。後、七卿を三田尻に守衛し、沢宣嘉を推して生野にて挙兵。同志とともに切腹した。

(14) 井関英太郎。一八四六〜一八六三。下関攘夷に参加した後、奇兵隊に入る。沢宣嘉を推して生野で挙兵するも、同志とともに切腹した。

(15) 一八四五〜一八六三。萩藩士。奇兵隊に入隊し、三田尻で七卿を守衛した。後、河上彌市らと沢宣嘉を擁して生野で挙兵したが、失敗し切腹した。

(16) 一八二八〜一八六三。商人。奇兵隊士。白石正一郎の弟。当初は商人として家事にはげんでいたが、商事で薩摩に赴き、藩主に時勢を論じて感賞を受け、以降、久光を援助するようになった。兄とともに奇兵隊に入り、士籍を与えられている。後、生野に挙兵し、自殺した。

(17) 一八三八〜一八六三。萩藩士。明倫館で学ぶ。奇兵隊に入隊し、三田尻で七卿を守衛した。後、河上彌市らと沢宣嘉を擁して生野で挙兵したが、失敗し切腹した。

(18) 一八四四〜一八六三。萩藩士。奇兵隊に入隊し、河上彌市らと沢宣嘉を擁して生野で挙兵した。失敗し同志とともに切腹した。

(19) 一八三五〜一八六三。萩藩士。奇兵隊に入隊し、河上彌市らと沢宣嘉を擁して生野で挙兵したが、失敗し切腹した。

(20) 塩谷岩陰のこと。(その一) 梁川星巖の註40に既出。

(21) (その二) 僧月照の註8に既出。

(22) 南霽雲。安禄山の乱に張巡に従って睢陽を守ったが、後に張巡とともに死んだ。

(23) 松本衡のこと。

(24) 一八一六〜一八六三。岡山藩経卒。天保から安政にかけて諸国を歴遊し、各地の人物と交友をもった。一時は伏見の言志塾で学問・武芸を教

授していたが、天誅組に参加。後、戦死した。

清水精一郎

嘉安中、国人悪外客殊甚。由其不悉外客情実。或有至殺身毫
不回顧者。謂之忠臣義士、殆不可。而謂之果非挙則過矣。清水
精一郎者、駿州土豪也。為人慷慨敢為、胆氣過人。年二十余。
抵江戸、聞一橋黃門賢、往委質。時攘夷論盛起。精一郎謂「不
可一毫毀辱国体」。視外客猶仇敵。一日赴横浜休茶店。見外客二
名騎過、幕吏數十随行。外客指精一郎、邦語連呼「浪士」。精一
郎聞之大怒、取捷徑先行、伏篠篁中、候二酋過、跳而出、先斬
大酋。小酋開拳銃擬之。精一郎翻身繞傍馬腹、執足擲之、又斬
之。既而諸外人及衆從者至。相視愕眙胆落。小酋未瞑。有一人
抉去其眼、將玻璃照写之。其群中有一士人急裝縛衣袴、背著桔
梗花章者。外客大憤怒、告幕府使物色更督之、期七日間捕獲。
否則償金五十万両。精一郎既斬二酋、脱去入品川妓楼。痛飲数
日。尽散其所懷金。楼主疑之密告。官吏來、將捕縛之。精一郎
叱曰「我清水精一郎也。前日斬英夷首。微汝來捕、固將自訴」。
連飲数杯就縛。市尹某詰其所以斬、則弁攘夷一点耳。某不復詰。
反寬遇之、致諸横浜、使外人甘心焉。五酋會議按其刑。美人亞
爾格曰「義士也。吾請贖之」。四酋許諾。復致之官、請贖死。市
尹召精一郎告以故。精一郎笑曰「公豈喪心乎。我日本男兒也」。

可死則死耳。何請命于羯奴乎」。遂下獄。元治二年乙丑正月二十八日。磔精一郎於横浜、以謝五国。勇哉、精一郎之拳也。其跡雖暴、其心実存報國。一身已死、而五国不致輒侮我。可謂忠矣。以今日言之、固為狂行。如當時、安得以狂行目之。抛外人以為義士、則知尊攘發於赤心者、決不可已。而尋後議和。亦不甚難也。為政須軫氣運。否則順人心而已。不堪衆者、自古每每有之。使熱心欲死於寇者甘心陣没。吾有余力、以致其後。又何難之有。是宰相之任也。當時宰相不得其人、使忠志之士吞恨而死。可勝歎哉。

嘉安中、国人の外客を悪むこと殊に甚だし。其の悉くは外客の情実ならざるに由る。或いは身を殺して毫も回顧せざるに至る者あり。之を忠臣義士と謂ふは、殆ど不可なり。而れども之を果して非拳と謂ふは則ち過ぎたり。清水精一郎は、駿州の土豪なり。人と為り慷慨して敢て為し、胆氣、人に過ぐ。年二十余、江戸に抵り、一橋黄門(一)の賢なるを聞き、往きて質を委ぬ(二)。時に攘夷論盛に起る。精一郎謂らく「一毫も国体を毀辱せしむべからず」と。外客を視ること猶ほ仇敵のごとし。一日、横浜に赴きて茶店に休す。外客二名の騎して過ぎ、幕吏数十の随行するを見る。外客、精一郎を指して、邦語もて「浪士」と連呼す。精一郎、之を聞きて大いに怒り、捷徑(三)を取りて先行し、篠篁の中に伏し、二酋の過ぐるを候ち、跳り

出でて、先づ大酋を斬る。小酋、拳銃を開きて之を擬る。精一郎、身を翻して傍らの馬の腹に繞り、足を執りて之を擲ち、又之を斬る。既にして諸外人及び衆徒の者、至る。相視て愕眙(四)胆落す。小酋は未だ瞑せず。一人の其の眼を抉り去り、玻瓈(五)を將て之を照写するあり。其の群中に一士人の急装に衣袴を縛りし、背に桔梗の花の章を著くる者(六)あり。外客大いに憤怒し、幕府に告げて物色して更に之を督し、七日間を期して捕獲せしむ。否(七)ずんば則ち金五十万両を償はしむ。精一郎、既に二酋を斬り、脱し去りて品川の妓楼に入る。痛飲すること数日。尽く其の懐せし所の金を散す。樓主、之を疑ひて密告す。官吏来りて、將に之を捕縛せんとす。精一郎叱して曰く「我は清水精一郎なり。前日英夷の首を斬る。汝の来りて捕すること微せば、固より將に自訴せんとす」と。数杯を連飲して縛に就く。市尹某、其の斬りし所以を詰すれば、則ち弁ずるに攘夷の一点なるのみ。某、復た詰せず。反つて寛く之を遇し、諸を横浜に致し、外人をして甘心(八)せしめんとす。五酋(九)、會議して其の刑を按ず。美人亜爾格(十)曰く「義士なり。吾、之を贖はんと請ふ」と。四酋許諾す。復た之を官に致し、死を贖はんと請ふ。市尹、精一郎を召して告ぐるに故を以てす。精一郎笑ひて曰く「公豈に心を喪ふか。我は日本男兒なり。死すべくんば則ち死すのみ。何ぞ命を羯奴(十一)に請はんや」と。遂に獄に下る。元治二年乙丑正月二十八日。精

一郎を横浜にはりつけ磔はりつけにし、以て五国に謝す。勇なるかな、精一郎の挙や。其の跡は暴なりと雖も、其の心は実に報国に存す。一身已に死して、五国輒ち我を侮るを致さず。忠なりと謂ふべし。今日を以て之を言へば、固もとより狂行たり。当時の如き、安くんぞ狂行を以て之を目するを得んや。外人の以て義士と為すに拠れば、則ち尊攘の赤心より発する者、決して已むべからざるを知る。而して尋ついでで後に議和す。亦甚だしくは難からずや。政を為すは須らく氣運を転ずべし。否しからざれば則ち人心に順ふのみ。衆に堪へざる者は、古より毎毎之れあり。心を熱くして寇に死せんと欲する者をして、甘心陣没(II)せしむ。吾、余力あらば、以て其の後を致さん。又何の難きことか之れ有らん。是れ宰相の任なり。当時の宰相は其の人を得ず、忠志の士をして恨みを呑みて死なしむ。勝あげて歎なげすべきかな。

—註—

(1) 徳川慶喜のこと。

(2) はじめて仕官すること。

(3) 近道のこと。

(4) 原文は「貽」に作るが文意により「貽」に改めた。愕貽は、驚き見るさま。

(5) 水晶、ガラス。

(6) 坂本龍馬のことか。

(7) 心を満足させる。氣を晴らす。

(8) 日本と条約を結んでいた米・英・露・仏・蘭の五カ国の代表をさす。

(9) 一八〇九—一八九七。英国外交官(「美人」は誤り)。安政六年、イギリス駐日総領事として着任。列国公使の対日外交の主導的地位を占めた。元治元年、解任され帰国。

(10) 羯は異民族の種族の名。ここでは西洋人を卑下して言ったもの。

(11) 討ち死にすること。

武田耕雲齋

水藩諸臣、主張攘夷、莫非正党之士。皆在奉其君尊王之旨。前後就死、幾百千人。而天下翕然稱之、以為忠盡所致。如武田耕雲齋等、其最可愍者乎。耕雲齋、名正生、字伯道、稱彦九郎。水戸藩士。跡部新八正統長子。以其系出于武田万千代丸、遂復武田氏。驍勇有胆略。好兵法、善論時務。文政十二年己丑。任使番。時藩主徳川斉修有病無子。執政忌其弟斉昭銳敏、欲迎將軍諸公子為嗣。正生率同志士四十余人、抵江戸力争、事終寢。遂立斉昭。弘化初。為少老。斉昭得譴、蟄居駒籠邸。正生与吉成信貞俱赴江戸、上書閣老水野越前守忠邦、陳斉昭事幕府極有礼、及姦臣結城寅寿結党流言之状。不聽。停職屏居。五年。見釈。号耕雲齋。從容自適。安政二年乙卯。復少老。明年。進為執政、食祿一千五百石。人材彙進、藩風一新。安政六年。斉昭奉攘夷詔、將行膺徵之典。幕府命止之、奉還勅書。正生謂使世

曰「勅書出公強請、則朝幕生變矣。天位安危、四海治乱、未可知也。宜發使者謝奉行怠慢之罪」。明年、義徒大唱攘夷、屯集于長岡駅。多正生所養也。遂不至奉還而寢。齊昭薨。正生等廢。市川三左衛門・朝日奈弥太郎等、用事。捕縛義徒十余名。文久三年壬戌春。一橋黃門朝京師。起正生謀事。正生謁天皇。叙從五位。称伊賀守。市川等廢。時正生党主尊王攘夷、自号誠心組。組猶曰党。市川等党主佐幕開港、号諸生組。諸生組謗誠心組自負、曰天狗。以邦俗謂自負者曰天狗也。在其中間者曰柳派。派亦猶曰党。謂其如柳靡風也。明年元治紀元春。市川等、与幕吏通謀為執政。廢正生等職幽之。正生等、大奮激、欲抵江戶訴幕府、糾合三百人、発水戸抵下総国小金原。先是、藤田信・竹内延秀等、亦聞市川等謀大怒、拳兵屯筑波山。号曰監察府。遠近騷然。正生与田丸直允等議、将行而鎮之。至則聽其說、為之總督。以直允名望尤高、推為軍師。以藤田信・竹内延秀・巖谷信成為三総裁。余量才任之。部署既定、乃作白木輿、載齊昭木主、大書從二位贈大納言源烈公、使白衣卒舁之。乘輿而從者四人、騎士八人、長槍・銃砲各一隊。鹵簿凡二百余人。発筑波向日光。道路舍次用葵章・紫幕。既抵日光、見日光奉行小倉某曰「我烈公奉攘夷之詔、事未成而薨。堂堂神州、遂受蛮夷之侮。吾輩傍觀、不勝忠憤。切齒之至。将藉烈祖之神靈、以掃攘橫浜醜虜之巢窟。請借寺院以為舍館」。某曰「告幕府而後聽之」。直允等、謁東照公廟、乃退軍大平山。伝檄四方。壯士來屬者日衆。諸生

党欲攻之、率藩士三百人赴江戶、請援於幕府。直允率兵復移筑波山。正生提六百余人屯小金原、将搗橫浜。六月。市川等、引導幕兵而至。全軍三千余人。館于下妻各処。筑波軍部署兵士凡一千余人。直諒伝酒一軍最之与戦、斬小林某。次日夜五更。藤田信等五将、跨馬帥兵三百余、鼓螺呐喊而進。乱發大砲、声震天地。幕吏永見某、单身逃。乘勝縱火蹂躪。天明上八幡山命餐。乃還筑波。直諒大悦。伝杯犒将士。八月。幕府命水府支藩松平大炊頭頼徳、代藩主鎮撫常野。大炊頭抵小金原、先說正生。正生義正言順。大炊頭感服、俱赴水戸。浪士來從者甚衆。全軍四千余人。八月十日。進次吉田村薬王院。遣使水戸、將入城。諸生党大驚、集議使人來謁曰「公入城亦可。若他士則不得入」。大炊頭与正生等怒。諸生党進軍、正生等乃向朝日奈・市川二人宅、発大砲。進渡那珂川、襲敵營破之。乘勝疾攻。敵乱射大砲、走那珂湊。十六日。正生乘曉霧進軍、呐喊縱火湊第一街。烟焰蔽天。敵皆敗走。正生与大炊頭議、欲諭諸生党休戦入城。遣使說之不肯。縛使者、砲擊大炊頭營。正生謂「彼大逆無道。宜殲之無噍類」。乃連発大砲。既而幕吏帥兵來、諸侯兵來援。我軍連不利。大炊頭為幕吏所欺、遂降。書生党、伝幕府命、使自裁。殺其從者、榜示衢路、以招降者。我軍不欲抗者相議而下。正生与田丸・藤田等八百余人、謀上京訴心事。出野州赴上州。会幕府命諸藩追擊、且戦且走。時天方雪、兵士凍餒。崎嶇間阻抵越前。先是、慶喜聞正生西上、請為大将率会・桑諸藩兵擊之。命加賀

兵為先鋒。正生聞之、令兵士解戎裝。遺書加賀陣營、陳情哀訴。加賀藩軍將永原甚七郎等、周旋甚力、而幕吏議不納。上書一橋黃門、亦不省。十二月。遂降加賀軍門。致書甚七郎有言曰「正生等業已与幕府兵抗戰、以犯大法。自知死尚有余罪。雖然、正生等心事、固青天白日矣。苟蒙流賊之名、則千載之下、死而有遺憾。請尊藩垂武門之情、為正生等善弁解焉。決死一言、止于此。他不知所言」。甚七郎置正生等于敦賀本勝寺及其他二三処。待遇甚厚。而幕吏惡之殊甚。翌年二月。処斬者、正生以下凡三百五十余人。其余流竄各有差。送正生首于水戸、肆諸獄門。於是海内人心尽離幕府。而其亡也決矣。正生年六十二。田丸直允年六十一。藤田信年二十三。山国其昌年七十三。竹内延秀年三十五。独岩谷信成適出在外、潛匿得免。正生被刑之日、天陰風烈、尋斬諸囚四次、每一次有陰風至。人皆異之云。

水藩の諸臣、攘夷を主張し、正党の士に非ざるはなし。皆其の君の尊王の旨を奉ずるに在り。前後、死に就くもの、幾百千人。而して天下、翕然(一)として之を称して、以て忠蓋(二)の致す所と為す。武田耕雲齋等の如きは、其の最も慤(あは)れむべき者か。耕雲齋、名は正生、字は伯道、称は彦九郎。水戸藩士。跡部新八正統の長子。其の系の武田万千代丸に出づるを以て、遂に武田氏を復す。驍勇にして胆略あり。兵法を好み、善く時務を論ず。文政十二年己丑。使番に任ぜらる。時の藩主徳川斉修(三)、

病ありて子なし。執政、其の弟斉昭の鋭敏なるを忌みて、將軍の諸公子を迎へて嗣と為さんと欲す。正生、同志士四十余人を率いて、江戸に抵り力争し、事終に寝む。遂に斉昭を立つ。弘化初。少老と為る。斉昭、譴を得て、駒籠邸に蟄居す。正生、吉成信貞(四)と俱に江戸に赴き、閑老水野越前守忠邦(五)に上書し、斉昭の幕府に事ふるに極めて礼あるを陳べ、姦臣結城寅寿(六)の結党して流言するの状に及ぶ。聴かれず。停職して屏居す。五年。釈さる。耕雲齋と号す。従容として自適す。安政二年乙卯。少老に復す。明年。進みて執政と為り、禄一千五百石を食む。人材彙進(七)し、藩風一新す。安政六年。斉昭、攘夷の詔を奉じ、將に膺(八)徴(九)の典を行はんとす。幕府、命じて之を止め、勅書を奉還せしむ。正生、使世に謂ひて曰く「勅書は公の強請より出づれば、則ち朝幕(十)を生ず。天位の安危、四海の治乱、未だ知るべからざるなり。宜しく使者を發して奉行の怠慢の罪を謝せしむべし」と。明年、義徒、大いに攘夷を唱へ、長岡駅に屯集す。多くは正生の養ひし所なり。遂に奉還に至らずして寝む。斉昭薨す。正生等廢せらる。市川三左衛門(十一)・朝日奈弥太郎(十二)等、事を用ふ。義徒十余名を捕縛す。文久三年壬戌春。一橋黄門、京師に朝す。正生を起てて事を謀る。正生、天皇に謁す。従五位を叙せらる。伊賀守と称す。市川等廢せらる。時に正生の党は尊王攘夷を主し、自ら誠心組と号す。組とは猶ほ党と曰ふがごとし。市川等の党は佐幕開港を

主し、諸生組と号す。諸生組は誠心組の自負するを誇り、天狗と曰ふ。邦俗に自負する者を謂ひて天狗と曰ふを以てなり。其の中間に在る者を柳派と曰ふ。派も亦猶ほ党と曰ふがごとし。其の柳の如く風に靡くを謂ふなり。明年元治紀元春。市川等、幕吏と謀を通じて執政と為る。正生等の職を廢して之を幽す。正生等、大いに奮激し、江戸に抵りて幕府に訴へんと欲し、三百人を糾合し、水戸を發して下総国小金原に抵る。是より先、藤田信(12)・竹内延秀(13)等も亦市川等の謀を聞き、大いに怒り兵を挙げて筑波山に屯す。号して監察府と曰ふ。遠近騒然たり。正生、田丸直允(14)等と議し、将に行きて之を鎮めんとす。至れば則ち其の説を聴き、之が総督と為る。直允の名望尤も高きを以て、推して軍師と為す。藤田信・竹内延秀・巖谷信成(15)を以て三総裁と為す。余は才を量りて之を任ず。部署既に定まり、乃ち白木の輿を作り、斉昭の木主を載せ、從二位贈大納言源烈公と大書し、白衣の卒をして之を舁がしむ。輿に乗りし從者四人、騎士八人、長槍・銃砲各おの一隊あり。鹵簿(16)凡そ二百余人。筑波を發して日光に向ふ。道路の舎次(17)には葵の章・紫の幕を用ふ。既に日光に抵り、日光奉行小倉某に見えて曰く「我が烈公は攘夷の詔を奉じて、事、未だ成らずして薨す。堂堂たる神州、遂に蛮夷の侮を受く。吾が輩傍觀するに、忠憤に勝へず。切齒の至りなり。將に烈祖の神靈を藉りて、以て横浜の醜虜の巢窟を掃攘せん。請ふ寺院を借りて以て舍館と為さ

ん」と。某曰く「幕府に告げて而る後に之を聴かん」と。直允等、東照公廟に謁して乃ち軍を大平山に退く。檄を四方に伝ふ。壮士の来り属する者日々衆し。諸生党、之を攻めんと欲し、藩士三百人を率いて江戸に赴き、援を幕府に請ふ。直允、兵を率いて復た筑波山に移る。正生、六百余人を提げて小金原に屯し、將に横浜を搗たんとす。六月。市川等、幕兵を引導して至る。全軍三千余人。下妻の各処に館す。筑波軍の部署兵士凡そ一千余人。直諒、酒を一軍に伝へ之を最め与に戦ひ、小林某を斬る。次日夜五更。藤田信等五將、馬に跨りて、兵三百余を帥いて、鼓螺(18)呐喊して進む。大砲を乱發し、声、天地を震はす。幕吏永見某、單身逃ぐ。勝ちに乗じて火を縦ち蹂躪す。天明け八幡山に上り餐を命ず。乃ち筑波に還る。直諒大いに悦ぶ。杯を伝へて將士を犒ふ。八月、幕府、水府の支藩の松平大炊頭頼徳(19)に命じて、藩主に代はりて常野(20)を鎮撫せしむ。大炊頭、小金原に抵り、先づ正生を説く。正生、義正しく言順なり。大炊頭感服し、俱に水戸に赴く。浪士の来り從ふ者甚だ衆し。全軍四千余人。八月十日。進みて吉田村の薬王院に次る。使を水戸に遣り、將に城に入らんとす。諸生党大いに驚き、集まり議して人をして来り謁せしめて曰く「公の城に入るも亦可なり。他士の若きは則ち入るを得ず」と。大炊頭と正生等と怒る。諸生党進軍し、正生等は乃ち朝日奈・市川二人の宅に向かひ、大砲を發す。進みて那珂川を渡り、

敵營を襲ひて之を破る。勝ちに乗じて疾く攻む。敵、大砲を乱射し、那珂湊に走る。十六日。正生、曉霧に乗じて進軍し、吶喊して火を湊第一街に縦つ。烟焰、天を蔽ふ。敵皆敗走す。

正生、大炊頭と議し、諸生党を諭して休戦し城に入らんと欲す。使を遣りて之を説くも肯へんぜず。使者を縛り、大炊頭の營を砲撃す。正生謂らく「彼は大逆無道なり。宜しく之を殲して噍類(2)なからしむべし」と。乃ち大砲を連発す。既にして幕吏兵を帥いて来り、諸侯の兵来り援く。我が軍連に利あらず。大炊頭、幕吏の欺く所と為り、遂に降る。書生党、幕府の命を伝へ、自裁せしむ。其の従ふ者を殺して、衢路に榜示(2)し、以て降る者を招く。我が軍の抗ふを欲せざる者は相議して下る。正生、田丸・藤田等八百余人と、京に上りて心事を訴へんと謀る。野州に出で、上州に赴く。幕府の諸藩に追撃を命ずるに会ひ、且つ戦ひ且つ走る。時に天方に雪ふり、兵士凍餒す。崎嶇(2)間関(2)し、越前に抵る。是より先、慶喜、正生の西上するを聞き、大将と為りて会・桑諸藩の兵を率いて之を撃たんと請ふ。加賀の兵に命じて、先鋒と為す。正生、之を聞き、兵士をして戎装を解かしむ。書を加賀の陣營に遣り、陳情哀訴す。加賀藩の軍将永原甚七郎(2)等、周旋甚だ力むるも、幕吏、議して納れず。一橋黄門に上書するも、亦省みられず。十二月。遂に加賀の軍門に降る。書を甚七郎に致して言ありて曰く「正生等の業已に(2)幕府の兵と抗戦し、以て

大法を犯す。自ら死して尚ほ余罪あるを知る。然りと雖も、正生等の心事は、固に青天白日なり。苟も流賊の名を蒙れば、則ち千載の下、死して遺憾あらん。請ふ、尊藩、武門の情を垂れ、正生等の為に善く弁解せられんことを。死を決しての一言、此に止む。他に言ふ所を知らず」と。甚七郎、正生等を敦賀の本勝寺、及び其の他二三処に置く。待遇甚だ厚し。而るに幕吏の之を悪むこと殊に甚だし。翌年二月。斬に処せられし者、正生以下、凡そ三百五十余人。其の余は流竄各おの差あり。正生の首を水戸に送り、諸を獄門に肆す。是に於て海内の人心尽く幕府より離る。而して其の亡ぶや決せり。正生は年六十二。田丸直允は年六十一。藤田信は年二十三。山国其昌(2)は年七十三。竹内延秀は年三十五。独り岩谷信成のみ適たま出でて外に在り、潜に匿れて免るを得。正生の刑せらるるの日、天陰り風烈しく、尋で諸囚を斬ること四次なるに、一次毎に陰風の至るあり。人皆之を異とすと云ふ。

—註—

(1) 集まるさま。

(2) 忠愛の心がつよく、進み努める。

(3) 一七九七〜一八二九。水戸藩主。徳川斉昭の兄で、斉昭の前の藩主。

文政一二年から天保一五年の間、在位。

(4) 吉成又右衛門。一七九七〜一八五〇。水戸藩士。藤田幽谷に学ぶ。弘化の藩難に藩主徳川斉昭の無実を嘆願して処罰された。病死。

(5) 一七九四〜一八五一。天保の改革を主導した老中。浜松藩主。しかし、嘉永一四年には改革も挫折に追い込まれ、老中罷免となる。翌弘化元年に老中に復職するも、八ヶ月で再辞職。この上書はその時のものということになる。

(6) 一八一八〜一八五六。水戸藩士。不平を持つ旧家世臣を集めて勢力を持ち、藤田東湖らと対立。弘化元年の藩難に際しては、東湖らと斉昭に随従して出府したが、執政を免ぜられ、四年に隠居を命じられる。嘉永六年、幽閉され、安政三年、死罪に処せられた。

(7) 世間から身を引いて、ひっそりと家にこもること。

(8) 同類の者が集まって朝廷に進み出ること。

(9) 征伐すること。

(10) 一八一六〜一八六九。水戸藩家老。安政の大獄の際、藩内の改革派鎮圧に努め、諸生党の首領として武田ら天狗党と対立した。藤田小四郎らが筑波山に挙兵すると、諸生党を率いて江戸に入り、幕府の援助を受けて天狗党を弾圧し、水戸城を占拠して藩政の実権をにぎった。しかし、明治元年、弘道館の戦いに敗れ、翌年逮捕されて処刑された。

(11) ?〜一八六八。水戸藩家老。市川三左衛門・佐藤図書らと並んで諸生派の首領と呼ばれた。元治元年の政変の際には、市川らとはかつて諸生派をひきいて江戸藩邸へと至り、天狗党の排除にあたった。明治元年、脱藩して会津へ走り、戦死した。

(12) 藤田小四郎。一八四二〜一八六五。水戸藩士。藤田東湖の四男。尊皇攘夷運動に参加し、筑波山に挙兵して天狗党の中心人物の一人となる、

西上の途中、加賀藩に降伏。刑死した。

(13) 竹内百太郎。一八三一〜一八六五。水戸藩士。元治元年、田丸稻之衛門らと筑波山に挙兵し、慶応元年、敦賀にて斬罪に処せられた。

(14) 田丸稻之衛門。一八〇五〜一八六五。水戸藩士。元治元年、藤田小四郎に迎えられて将となり筑波山に挙兵した。藩庁の説得にも応ぜず、各地を転戦。後武田勢と合流し、西上の途中、加賀藩に降伏して斬罪に処せられた。

(15) 水戸藩士。郷校潮来館幹事を務めていた。筑波山挙兵の際には総裁を務め、軍の補翼の任にあたった。途中脱出し、維新後は山岡鉄舟を頼って宮内省に出仕した。

(16) 天子の行列。

(17) 軍隊が宿ること。

(18) 太鼓を叩き法螺貝を吹きながら、の意。

(19) 一八二九〜一八六四。水戸支藩の宍戸藩主。元治元年の水戸藩の政変により、幕府から藩内鎮撫のため水戸に派遣されるも、出迎への参政天野伊内が従者の政敵榊原・武田らの入城を阻止して発砲。後に武田らとともに行動するが、水戸に招致され切腹を命じられた。

(20) 常陸と上野のこと。

(21) 生きている人のこと。

(22) 立て札をたてること。

(23) 山道の険しいさま。

(24) 道路が険しくて行き悩むさま。

(25) 加賀藩士。天狗党討伐軍軍監。武田耕雲斎と書簡を往復し説得。降服

させた後は加賀の三カ所の寺院に反乱軍を收容し、志士として礼遇した。

(26) もはや。

(27) 山国喜八郎。一七九三—一八六五。水戸藩士。武田耕雲齋・会沢正志齋らと親交を重ね、筑波山拳兵には途中から参加した。西上の途中、敦賀で捕らえられ斬殺された。

久阪元瑞

有馬卓也

長藩言尊攘、推吉田松蔭。松蔭死後、其門人久坂元瑞・高杉晋作等、特以節烈著。蓋其智非不察攘夷之難。而其志欲果尊皇之衷也。久阪元瑞、名通武、字実甫、元瑞其称。一称義助。号江月齋。長門藩士也。父為医官。早没。兄真、称元機。個儻超群、常以外事為憂、折節誦洋文、訳書數十種。率係大砲銃隊事。又嘗訳述種痘書。關藩多免病痘。有一洋学者、謂元機曰「某月日正当泰西正朔。請置酒会友」。元機罵曰「病痴子、吾安奉彼正朔乎」。安政初。没。元瑞不欲業医。受兵学于吉田松蔭。松蔭稱為少年奇才・国士無双、後遂以女弟配之。元瑞又欲知海外事。入藩校博習堂、研究洋学。年十七八。遊鎮西、遂經山陽・東海抵江戸。到处審其山河形成、察諸藩政教武備、与志士交結。歳余而帰。二十。再抵江戸、入芳野金陵門、講習漢学。見外客跋扈大憤、与水戸及薩土二藩志士密議、将襲而殺之。藩主聞之、遽命帰国。及井伊氏遇刺、雀躍曰「世局庶乎其一变邪」。文久二

年壬戌春。与高杉晋作等俱入京、著『回瀾条議』一篇、述王政改革之策。時藩主父子在京、与薩土二侯議国是。十月。藩世子奉朝命、与勅使共赴江戸、与幕臣妥議。元瑞隨行、周旋甚力。久之不決。大歎幕府因循。与高杉晋作議、将抵横浜縱火洋館。脱走而行。世子聞之大驚、馳馬到大森。見元瑞等、咎其輕舉、且諭且泣。二人流涕頓首曰「臣等狭中、殆誤公。死有余罪」。遂從世子帰邸。世子留江戸数月、不得要領而帰。元瑞請留江戸。蓋欲有為也。先是、幕府為英人築居館于御殿山。極宏壯。志士皆憤之。元瑞謂「御殿山為江戸要衝、而使外客拋之、猶使盜守庫也」。一夕風烈。潛行其側、举火焚之。衆呼快。而幕府不知其為何人所為也。既而元瑞益唱尊攘。藩侯恐其獲罪、遽召還之。明年春。上京、入學習院、出入公卿門、大唱攘夷。四月。見閣老板倉周防守勝靜、促掃攘期。元瑞以為「攘夷之舉、不可一日緩。而遷延如此、君側邪人壅蔽也」。与同藩寺島昌昭・肥後轟寛胤等謀、将直詣闕請詔、恐陪臣犯闕之罪、沈思默想者良久、乃又自奮曰「赤心報国、寧請之耳。一死以謝則可矣」。三人、齋戒沐浴、詣闕抗疏。伏地不動。時世子在嗟峨。方食聞之大驚、投箸呼馬、直馳詣闕。告闕白鷹司氏、請其处分。闕白愕然、朝奏請宥。主上感歎、不問其罪。既而朝廷遽召關西諸侯、会於京師。謂「幕府矯詔遷延攘夷也。将行幸大和、起兵親征」。頒告其旨於天下。以五月十日為期。志士抃舞雀躍。元瑞名、高於一世。於是、世子帰国、築堡砦嚴守備。遠近志士聞之、雲合響應、忽得

数千人。名曰奇兵隊。元瑞為之長。後晋作代之云。元瑞之為隊長也、藩侯命為先鋒。擊洋艦于馬関、奮戰激鬪、遂得攘之。朝廷大賞其功。藩主亦進其資格為參政。既而聞姉小路少將為人刺殺、元瑞曰「胡為其然也」。八月十八日。廷議俄變、禡三条公以下十二人官職、停其參朝、逐長藩所守堺町門兵。命薩摩・会津諸藩守之。元瑞聞變急登京。悲憤竭力、欲回廷議。勅使來諭、固請不聽。謁関白、訟幕府亡狀。禁城九門尽鎖、不許長人出入。元瑞益激怒、破関白後門、直昇殿舍見関白。切齒扼腕、反復論難。関白与諸公卿、不知所答。元瑞乃退。抛方広寺謀擊幕吏不果。遂奉七卿帰長門。自是京師益多事、物論洶洶。元治元年甲子。藩老臣福原越後・益田右衛門・国司信濃等、率兵登京、上書訟藩主冤、請允入京。分屯嵯峨・伏見・天王山三处。元瑞變姓名曰松野三平。別按兵在天王寺。諸藩志士、多来属者。六月二十四日。元瑞与筑後真木保臣・筑前中村無二、及同藩寺島昌昭・入江弘毅等、作文連署、呈関老稻葉美濃守、請献之禁闕。大意謂「讒誣欺罔之徒、誇衒敵人富強・砲艦巨大、艷称奇技淫巧、濫出日用物貨。不知国家榮辱在国体嚴立与否。不在一時勝敗、主張武備充實之説、經十年無一驗。十年之後視今、猶今視癸丑以来而已」。不省。七月十九日昧爽。元瑞与国司信濃・来島政久等合謀。国司・来島、率九百人自嵯峨入、元瑞与入江弘毅、率五百人自山崎入、將殺会津侯松平容保等、入闕哀訴。元瑞与来島、先破石山・八条二氏後門、進入郭内。砲擊容保等所守凝

花洞宮、進到蛤門内勸修寺氏門前。時所司代桑名侯兵、戍御庖門、会津兵戍宜秋門。而島津氏出兵援会津与戰。衆寡不敵、退抛鷹司氏邸。井伊・福井・桑名・一橋等兵、自四面來圍。彈丸雨注。容保下令放火上風。元瑞馳火焰中、奮戰甚力。既而負傷、流血淋漓。殆不能步。自知其不可免。囑入江弘毅以後事。弘毅欲与死。通武怒而尼之、且曰「諸君退兵抛天王寺、与嵯峨・伏見兵合謀再擊」。衆乃突圍奔山崎。国司等亦不利而退。元瑞上樓屠腹、投身火焰而死。時年二十有六。寺島昌昭既負傷、在鷹司氏邸為火焰困。從容吟絶命詩、与元瑞同屠腹。年二十二。入江弘毅將突圍出、中敵丸斃于門外。年二十七。諸人皆松陰門人、称一時之英。松陰深属望弘毅、愛其誠實。与高杉晋作才識、並称曰聯璧云。来島政久率衆奮鬪甚力、遇敵彈中胸而没。部下死者尤多。鳥呼、元瑞一心尊攘、率先天下。雖云過激、発於至誠。必有此心、然後可処万變。蓋謂義可為、以必死当之、而不見事不可為也。豈尋常人物所能企及乎哉。

長藩の尊攘を言ふは、吉田松陰を押す。松陰の死後は、其の門人の久坂元瑞・高杉晋作等、特に節烈なるを以て著はる。蓋し其の智は攘夷の難きを察せざるに非ず。而れども其の志は尊皇の實を果さんと欲するなり。久坂元瑞、名は通武、字は実甫、元瑞は其の称。一に義助と称す。号は江月斎。長門藩士なり。父は医官たり。早くに没す。兄は真、元機と称す。個儻工

超群にして、常に外事を以て憂と為し、節を折りて洋文を読み、書を訳すること數十種。率ね大砲銃隊の事に係る。又嘗て種痘の書を訳述す。藩を闖^すべて多く痘を病むを免れしむ。一洋学者ありて元機に謂ひて曰く「某月日は正に泰西の正朔に当る。請ふ酒を置きて友と会はん」と。元機罵りて曰く「病痴子^三、吾、安ぞ彼の正朔を奉ぜんや」と。安政初。没す。元瑞、医を業とするを欲せず。兵学を吉田松陰に受く。松陰、称して少年奇才・国土無双と為し、後遂^ひに女弟を以て之に配す。元瑞、又海外の事を知らんと欲す。藩校博習堂に入り、洋学を研究す。年十七八。鎮西に遊び、遂^ひに山陽・東海を経て江戸に抵^{いた}る。到る処、其の山河の形成を審かにし、諸藩の政教武備を察し、志士と交結す。歳余にして帰る。二十。再び江戸に抵^{いた}り、芳野金陵^三の門に入り、漢学を講習す。外客の跋扈するを見て大いに憤り、水戸及び薩土二藩の志士と密に議し、將に襲ひて之を殺さんとす。藩主之を聞き、遽^{にはか}に命じて国に帰す。井伊氏の刺に遇ふに及び、雀躍^四して曰く「世局、其れ一変するに庶^{ちか}からんや」と。文久二年壬戌春。高杉晋作等と俱に京に入り、『回瀾条議』一篇を著はし、王政改革の策を述ぶ。時に藩主父子、京に在り、薩土二侯と国是を議す。十月。藩の世子、朝命を奉じ、勅使と共に江戸へ赴き、幕臣と妥議す。元瑞随^ひ行し、周旋甚だ力^とむ。之を久くして決せず。大いに幕府の因循なるを歎ず。高杉晋作と議して、將に横濱に抵^{いた}り洋館に縦火せんとす。脱走して行く。

世子、之を聞きて大いに驚き、馬を馳せて大森に到る。元瑞等を見、其の軽拳を咎^{とが}め、且つ諭し且つ泣く。二人流涕頓首して曰く「臣等、狭中にして、殆^{ほとん}ど公を誤る。死するも余罪あり」と。遂^ひに世子に従ひて邸に帰る。世子、江戸に留まること数月なるも、要領を得ずして帰る。元瑞、江戸に留まるを請ふ。蓋し為すことあらんと欲すればなり。是より先、幕府は英人の為に居館を御殿山に築く。極めて宏壮なり。志士皆之を憤る。元瑞謂^{おも}らく「御殿山は江戸の要衝たるに、外客をして之に抛らしむは、猶ほ盜をして庫を守らしむるがごときなり」と。一夕風烈^{はげ}し。其の側に潜行して、火を挙げ之を焚く。衆、快と呼ぶ。而れども幕府は其の何人の為す所と為るかを知らざるなり。既にして元瑞益^{ます}ます尊攘を唱ふ。藩侯、其の罪を獲ることを恐れ、遽^{にはか}に召して之を還す。明年春。京に上り、学習院に入り、公卿の門に出入し、大いに攘夷を唱ふ。四月。閣老板倉周防守勝^{かつ}静^まに見え、掃攘の期を促す。元瑞以^{おも}て為らく「攘夷の挙は、一日も緩やかにするべからず。而るに遷延すること此の如きは、君の側の邪人の壅^{よう}蔽^{へい}するなり」と。同藩の寺島昌昭^五、肥後の轟^{とん}寛胤等と謀りて、將に直^{ただ}に闕^{けつ}に詣りて詔を請はんとするも、陪臣の闕^{けつ}を犯すの罪を恐れて、沈思黙想する者^{こと}良久しくして、乃ち又自ら奮ひて曰く「赤心報国は寧^むろ之を請ふのみ。一死もて以て謝すれば則ち可なり」と。三人、齋戒沐浴して闕^{けつ}に詣りて抗疏す。地に伏して動かず。時に世子は嗟峨に在

り。方に食せんとするに之を聞きて大いに驚き、箸を投じて馬を呼び、直に馳せて闕に詣る。関白鷹司氏に告げ、其の処分を請ふ。関白愕然として、朝奏して宥を請ふ。主上感歎し、其の罪を問はず。既にして朝廷遽に関西の諸侯を召して京師に会さしむ。「幕府は詔を矯めて攘夷を遷延す。將に大和に行幸して兵を起し親征せん」と謂ふ。其の旨を天下に頒告す。五月十日を以て期と為す。志士、林舞(三)雀躍す。元瑞の名、一世に高し。是に於て、世子国に帰り、堡砦を築き守備を嚴にす。遠近の志士、之を聞き、雲合響應し、忽ち数千人を得。名づけて奇兵隊と曰ふ。元瑞、之が長と為る。後に晋作之に代ると云ふ。元瑞の隊長と為るや、藩侯命じて先鋒と為す。洋艦を馬関に撃ち、奮戦激闘して、遂に之を攘ふを得。朝廷大いに其の功を賞す。藩主も亦其の資格を進めて参政と為る。既にして姉小路少将の人に刺殺されると聞き、元瑞曰く「胡ぞ其の然るを為すか」と。八月十八日。廷議俄に變じ、三条公以下十二人の官職を褫ひ、其の参朝を停め、長藩の守る所の境町の門に兵を逐ふ。薩摩・会津の諸藩に命じて之を守らしむ。元瑞、變を聞きて急ぎ京に登る。悲憤竭力して、廷議を回さんと欲す。勅使の来りて諭すも、固く請ひて聴かず。関白に謁し、幕府の亡状を訟へんとす。禁城の九門尽く鎖がれ、長人の出入を許さず。元瑞益ます激怒し、関白の後門を破りて、直に殿舎に昇り、関白に見ゆ。切齒扼腕して、反復して論難す。関白

と諸公卿と、答ふる所を知らず。元瑞乃ち退く。方広寺に抛りて幕吏を撃たんと謀るも果せず。遂に七卿を奉じて長門に帰る。是より京師益ます事多く、物論洶洶たり。元治元年甲子。藩の老臣福原越後・益田右衛門・国司信濃(四)等、兵を率いて京に登り、上書して藩主の冤を訟へ、允を請はんと京に入る。分ちて嵯峨・伏見・天王山の三処に屯す。元瑞、姓名を變じて松野三平と曰ふ。別に兵を按じて天王寺に在り。諸藩の志士、来属する者多し。六月二十四日。元瑞、筑後の真木保臣・筑前の中村無二(五)、及び同藩の寺島昌昭・入江弘毅(六)等と文を作りて連署し、関老稲葉美濃守(七)に呈し、之を禁闕に献せんことを請ふ。大意に謂ふ「讒誣欺罔(八)の徒、敵人の富強・砲艦の巨大なるを誇(九)し、奇技の淫巧を艶称(一〇)し、日用物貨を濫出す。国家の榮辱は国体の嚴立するに在るを知らざるや否や。一時の勝敗に在らず、武備充実の説を主張するも、十年を経て一驗もなし。十年の後に今を視れば、猶ほ今に癸丑(一一)以来を視るがごときのみ」と。省みられず。七月十九日味爽。元瑞、国司信濃・来島政久等と合謀す。国司・来島は九百人を率いて嵯峨より入り、元瑞は入江弘毅と五百人を率いて山崎より入り、將に会津侯松平容保等を殺し、闕に入りて哀訴せんとす。元瑞と来島と、先づ石山・八条の二氏の後門を破り、進みて郭内に入る。容保等の守りし所の凝花洞管を砲撃し、進みて蛤門内の勧修寺氏(一二)の門前に到る。時に所司代桑名侯(一三)の兵は

御庖門を成り、会津の兵は宜秋門を成る。島津氏、兵を出だして会津を援け与に戦ふ。衆寡敵せず、退きて鷹司氏の邸に拠る。井伊・福井・桑名・一橋等の兵、四面より来り囲む。弾丸雨のごとく注ぐ。容保、令を下して火を上風に放つ。元瑞、火焰の中を馳せて、奮戦甚だ力む。既にして傷を負ひ、流血すること淋漓。殆ど歩くあたはず。自ら其の免るべからざるを知る。入江弘毅に囑するに後事を以てす。弘毅、与に死せんと欲す。通武、怒りて之を尼め、且つ曰く「諸君は兵を退けて天王寺に拠り、嵯峨・伏見の兵と合して再撃を謀れ」と。衆乃ち囲を突きて山崎に奔る。国司等も亦利あらずして退く。元瑞、楼に上り腹を屠り、身を火焰に投じて死す。時に年二十有六。寺島昌昭も既に傷を負ひ、鷹司氏邸に在りて火焰に囲まる。従容として絶命詩を吟じ、元瑞とともに腹を屠る。年二十二。入江弘毅は将に囲を突きて出づるも、敵丸に中りて門外に斃る。年二十七。諸人は皆松陰の門人にして、一時の英と称せらる。松陰、深く弘毅を属望し、其の誠実なるを愛す。高杉晋作の才識と並び称して聯璧(19)と曰ふと云ふ。来島政久は衆を率いて奮闘甚だ力むるも、敵に遇ひ弾の胸に中りて没す。部下の死する者尤も多し。烏呼、元瑞は一へに尊攘を心とし、天下に率先す。過激と云ふと雖も、至誠に発す。必ず此の心ありて、然る後に万変に処するべし。蓋し義為すべしと謂ひて、必死を以て之に当るも、事を見ずんば為すべからざるなり。豈に尋常の人物の能

く企て及ぶ所ならんや。

—註—

- (1) 才氣が衆人にかけてはなれてすぐれていること。
- (2) ばかという病氣にかかっている人のこと。
- (3) 一八〇二〜一八七八。田中藩儒。亀田鵬斎・綾瀬父子に学び、浅草福井町に塾を開く。後、駿河田中藩に出仕し、藩政改革に成果をあげた。さらには昌平黌の儒官となる。安井息軒・塩谷岩陰・藤森弘庵・藤田東湖らと交友があつた。
- (4) 小躍りして喜ぶこと。
- (5) 一八二三〜一八八九。備中松山藩主。安政の大獄において、その処刑方針に反対し、寺社奉行を免職される。その後、老中に進み、生麦事件・攘夷奉勅問題などを処理した。徳川慶喜の幕政改革を補佐していたが、鳥羽伏見の戦いの後、函館にまで至る。
- (6) 寺島忠三郎。一八四三〜一八六四。萩藩士。吉田松陰に学ぶ。尊皇攘夷運動に奔走し、藩の家老長井雅楽の暗殺を謀るなどした。禁門の変の際、久坂玄瑞らとともに切腹した。
- (7) (その二) 梅田雲濱の註27に既出。
- (8) 手を打って躍りあがること。
- (9) 福原、一八一五〜一八六四。益田、一八三三〜一八六四。国司、一八四二〜一八六四。三者ともに萩藩家老で、藩の要職を歴任し藩政改革などにつとめた。禁門の変の後、藩に帰着した時、藩の政権は恭順派に握られ、幕府への謝罪のためとして皆切腹させられた。

(10) 中村恒次郎。一八四一〜一八六四。福岡藩士。諱は無可(無二は誤り)。

元治元年、長州藩が藩主父子の雪冤のため藩兵を東上させた際、真木和泉のひきいる忠勇隊に加わる。討死。

(11) 入江九一。一八三七〜一八六四。萩藩士。吉田松陰に学び、高杉晋作を助け下関で奇兵隊の創設に尽力した。禁門の変に久坂玄瑞らと山崎天玉山に屯し、参謀として奮戦した。被弾して重傷を負い切腹した。

(12) 稲葉正邦。一八三四〜一八九八。淀藩主。老中。文久三年から元治元年、所司代に就任し、松平容保とともに尊王討幕の過激派を抑え、八一八の政変を挙行した。そのほか幕末期の難事に老中としてあたった。

(13) ありもしないことを言つて人をそしること。

(14) 自慢して見せびらかすこと。

(15) うらやみほめること。

(16) 嘉永六年。

(17) 勧修寺経理(つねおさ)。一八二八〜一八七一。公家。毛利家の執事家として長州藩との連絡に当たっていた。禁門の変の後、長州のために策動したとして蟄居を命ぜられた。明治元年、赦免された。

(18) 松平定敬(さだあき)。一八四六〜一九〇八。桑名藩主。会津藩主松平容保の弟。京都所司代として幕末の京都の治安維持に努めた。戊辰の際も主戦論を唱え、会津・五稜郭と転戦した。

(19) 一对の玉。二つそろって美しいものたとえ。

(その二) 訂正

1、73頁下2 「失脚して」

2、76頁下13 「嘗心折くも」

3、82頁下3 「孤臣の此の行 万人観る」

4、92頁下16 「倉皇として膝を折りて夷蛮を拝す」

5、98頁下15 「苦辛 本もと識る 三顧に由り」

6、98頁下16 「忠勇 心なし 二天を戴くを」